

公立大学法人 滋賀県立大学

「近江楽座」

2021年度 活動報告書

近江楽座は「学生らしさを生かして、地域に学び、育ち、貢献できる場」を目指しています

地域の居場所を見つけよう

私には今、いくつかお気に入りの場所がある。何の目的もなく通りがかった場所の居心地のよさに惚れて通い始めたまちもある。私たちは毎日一定時間を同じ場所で過ごす生活習慣から、それぞれの日常という意識を作っている。そんな中、私たちは居心地のよい場所を持っているだろうか。気に入った場所を見つけることも大切だ。気の合う人と居合わせることで、仲間ができて、その場所が居心地良くなることもある。しがらみのない知らないまちで、初めて合う人たちと、興味の赴くままに趣味的な活動をはじめしてみる。時間の許す範囲で十分だ。そんな活動には、地域の営みが一変するようなヒントが溢れている。まるで合言葉のように仲間たちとの意思決定が自然とできるようになる。こうやっているとう心地よい居場所が見つかるものだ。

地域活動という行動のきっかけは、多くの場合個人的興味から始まる。最初は私もその通りだと思っていたが、興味もなくなつた何度も通っているうちにファンになり、これまでに学んだ経験を見栄にして住人顔することができるようになった嬉しいまちもある。こんな思わぬことで居場所ができてしまうことがある。学生たちにとっても、「せっかく学んでいる知識を試してみたい。」という活動への使命感や正義感が湧き上がってくるものだ。何を指針にすればいいかわからない状態でも、学生時代の一定期間に、やれるならやっておくといいだろう。最近日本全国で繰り返されている地域活動の中には、余計なお世話活動、必要のない需要喚起、薄っぺらな地域資源を観光化するなど、活動の供給超過が感じられる。何が無駄で何が無駄でないか、先の見通しが立たない中でも活動自体を肯定的に捉えてしまっている。過剰な活動は達成感も大きいですが、達成後のモチベーショ

ンを保つのが難しい。また、強い継続性がある活動は、厳しいルールと、多くの人的、経済的負担がかかる。機能不全になり辞めにくくなる罠が潜んでいる。成果や、成功という尺度で活動が続いていると、次第に活動のために活動しているような状態になる。そんな時は、一見非効率そうに見える昔ながらの地域の風習に目を向けてみよう。そこには居心地の良い雰囲気溢れる場所が見つかるはずだ。必然として継承されてきた風習には地域の人たちの阿吽のスタンスが成立している。そして他を気にしたり、比べたりすることはなくなり、その場所、地域独自の魅力や資源に寄り添うような活動が繰り返されている。学ぶことは真似ることだ。これからは、社会制度の新たな仕組みとして、人々の居場所を見つけ、心地よい時間を共有できる活動が必要となってくるだろう。短い大学時代に学生たちが地域の風習、活動に参画、経験できるそんな環境が、近江楽座から生まれている。様々な異物と遭遇して学び、失敗を繰り返して成長していく。地域のささやきに耳を澄ませ、常に聞く耳を持つ状態を維持することが地域活動の極意かもしれない。

2022年12月
近江楽座専門委員会委員長
印南比呂志
(人間文化学部 生活デザイン学科)

	はじめに	1
1	近江楽座について	5
	1-1 近江楽座とは	6
	1-2 プロジェクト区分	7
	1-3 プロジェクトの採択について	8
	1-4 新型コロナウイルスへの対応	10
2	各プロジェクトからの活動報告	11
	2-1 活動実績報告	11
	2-2 『らくざしんぶん』	58
3	共通プログラムの報告	65
	3-1 中間報告会	66
	3-2 活動成果報告会	69
	3-3 キャンパス SDGs びわ湖大会 2021	72
4	学生有志活動	73
	4-1 WEB オープンキャンパス	74
	4-2 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ 再生プロジェクト」	75
5	その他トピックス	77
	5-1 表彰	78
	5-2 滋賀県安心安全店舗の認証	79
	5-3 地域との新たな関わり	80
6	情報発信	81
	6-1 ホームページ、リーフレット、 キャンパスガイド、活動紹介動画	82
7	付録	83
	7-1 プログラム推進メンバー	84
	7-2 メディア掲載一覧	85
	7-3 新型コロナウイルス感染拡大防止のための 近江楽座活動指針	87
	7-4 お知らせ	89

1 近江楽座について

滋賀県立大学の「近江楽座」は、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」を目的とする学生主体のプロジェクトを募集、選定し、全学的に支援する教育プログラムです。

2004年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に採択され、2006年度までの3年間の活動実績が大学発地域貢献の先進的な取組として学内外で高く評価されました。そして、翌2007年度からは大学独自の予算を用いてプログラムを継続し、2021年度までの18年間で延べ404のプロジェクトが地域と連携した活動を展開しています。

教育効果を高め、大学と地域の連携を深めるための3つの目標

- 地域の課題に学生・大学が取り組み、地域の活性化に向けて共に活動する。
- 学生が地域の方々と一緒に活動することにより、学内だけでは学べないことを体験する。
- 大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。

3つのサポートシステム

近江楽座専門委員会・学生委員会・近江楽座事務局(地域共生センター)の連携の下、3つのサポートシステムにより、全学的に活動を推進しています。

活動助成システム

「近江楽座」として選定されたプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

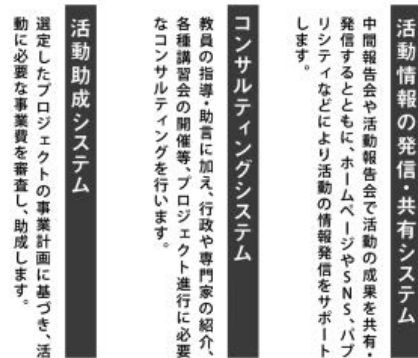
コンサルティングシステム

教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介、各種講習会の開催など、学生がプロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

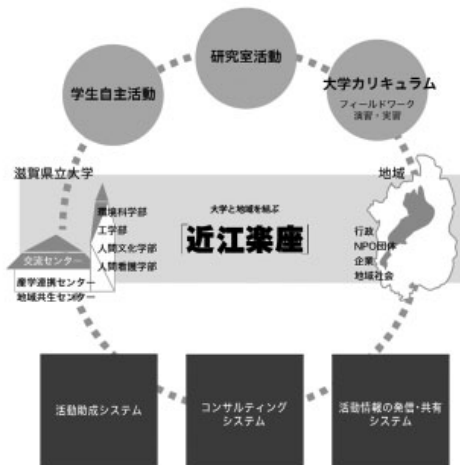
活動情報の発信・共有システム

中間報告会や活動報告会で活動の成果を共有・発信するとともに、ホームページやSNS、パブリシティなどにより活動の情報発信をサポートします。

<3つのサポートシステム>



<サポートシステム概念図>



1-2 プロジェクト区分

2007年度より、「地域活性化への貢献」をテーマに学生主体の地域活動を行う「Aプロジェクト(学生主体型プロジェクト)」に加え、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成し活動する「Bプロジェクト(地域協働型プロジェクト)」がスタートしました。

Ⅰ Aプロジェクト(学生主体型プロジェクト)

SDGsの視点を踏まえ「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を3つの区分で募集し、支援するプロジェクトを選定しています。

① 継続プロジェクト

過去に近江楽座の助成を受けたことがあるプロジェクト。

② 新規プロジェクト

近江楽座の助成を受けたことがないプロジェクト。

③ Sプロジェクト(2011年度～)

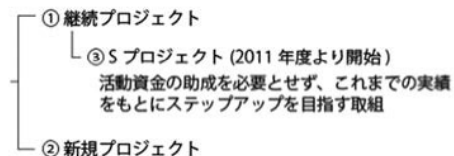
近江楽座でのこれまでの実績をもとにステップアップを目指し、活動資金の助成を必要としない自立したプロジェクト。(上位 senior、特別 special のS)

Ⅱ Bプロジェクト(地域協働型プロジェクト)

自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトを募集します。学生チームにはテーマに対する企画提案を求め、採択されたチームは、指導教員と地域共生センターが支援し、依頼先と共同で取り組みます。

Aプロジェクト(学生主体型プロジェクト)

SDGsの視点を踏まえ「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動プロジェクト。



Bプロジェクト(地域協働型プロジェクト)

学生が主体となって取り組むのがふさわしい自治体や企業等から提示された課題に、学生チームと依頼先とが協働で取り組むプロジェクト(2007年度より開始)

プロジェクト募集期間

A プロジェクト

B プロジェクト<発掘型>

日 時：2021年4月19日(月)～5月17日(月)

通常、Bプロジェクトは自治体や企業、団体等の依頼に基づき、学生グループを募集し実施することとしているが、地域課題解決に向けた地域協働の取組を広げていくため、本年度に限り、大学側から提案していく発掘型のプロジェクト(5件程度)を同時募集した。

応募件数

A プロジェクト 22件

・継続プロジェクト17件
(うちSプロジェクト1件)

・新規プロジェクト5件

B プロジェクト 0件

プロジェクト審査

A プロジェクト「プレゼンテーション・審査会」

日 時：2021年6月13日(土)

場 所：講義棟 A3-301

内 容：プレゼンテーション(プレゼンテーションシートによるプロジェクト説明)および質疑応答、審査(非公開)

選定委員(順不同 敬称略)：

- 滋賀県立大学 地域連携担当理事
地域共生センター長 高橋滝治郎
- 滋賀県立大学 環境科学部 講師 高屋麻里子
- 有限会社 滋賀飲料 専務取締役
(彦根商工会議所青年部会長) 瀧圭介
- 株式会社 岡村本家 宮崎瑛圭
- 滋賀県立大学 人間文化学部 教授
近江楽座専門委員会 委員長 印南比呂志

採択および採択通知

A プロジェクト

日 時：2021年6月18日(木)

通知方法：近江楽座ホームページおよび学生ホール掲示板にて通知

採択件数

A プロジェクト 22チーム

- ・継続プロジェクト17件
(うちSプロジェクト1件)
- ・新規プロジェクト5件
(うち4件をBプロジェクト<発掘型>枠で採択)

活動説明

日 時：2021年6月22日(月) 12:30～13:00

場 所：交流センター 研修室1～3

内 容：採択プロジェクト代表者に対する審査会講評、活動全般にあたっての注意事項、事業計画、会計処理等の進め方に関する説明会

追加募集

学生の力による元気滋賀絆づくり創出プロジェクト事業による学生活動の新規創出・拡大を促すため、Bプロジェクト<発掘型>の追加募集を次のとおり行い、1プロジェクトが採択された。

募集期間：2021年7月9日(金)～7月23日(金)
1件の応募があった。

プロジェクト：2021年7月29日(木) 18:30～19:00
審 査 リモートで1件がプレゼンを行い、前記と同じ5名の選定委員が審査を行った。

結果発表：2021年8月5日(木)
応募プロジェクト1件を採択した。

<プレゼンテーション・審査会 スケジュール>

時間	発表順	区分	採択年数	チーム名	プロジェクト名
9:30～9:35	はじめの挨拶				
9:35～10:25	1	新規・継続	12年(2009～)	とよさらだプロジェクト	とよさらだプロジェクト
	2	新規・継続	9年(2012～)	スチューデント・キュレイターズ	地域博物館プロジェクト
	3	新規・継続	10年(2011～)	滋賀県大生き物研究会	内湖の再生と地域の水辺コーディネート
	4	新規・継続	15年(2005～)	フラワーエネルギー「なの・わり」	フラワーエネルギー「なの・わり」
	5	新規・継続 S	12年(2009～)	あかりんちゅ	あかりんちゅ
	6	新規・継続	14年(2004～)	ボランティアサークルHarmony	障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト
	7	新規・継続	8年(2013～)	政所茶レン茶`ー	政所茶レン茶`ー
10:25～10:35	休憩				
10:35～11:25	8	新規・継続	17年(2004～)	とよさと快蔵プロジェクト	とよさと快蔵プロジェクト
	9	新規・継続	11年(2010～)	おとくらプロジェクト	おとくらプロジェクト
	10	新規・継続	-	竹林GAKU	犬上川竹林整備プロジェクト
	11	新規・継続	17年(2004～)	Taga-Town-Project	Taga-Town-Project
	12	新規・継続	-	お山さんありがとさん	お山さんありがとさん
	13	新規・継続	-	沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト	沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト
	14	新規・継続	-	県大ラジオ部	県大ラジオ部
11:25～11:35	休憩				
11:35～12:31	15	新規・継続	5年(2016～)	BAMBOO HOUSE PROJECT	BAMBOO HOUSE PROJECT
	16	新規・継続	9年(2012～)	たけともミライ	たけともミライ
	17	新規・継続	16年(2005～)	廃棄物バスターズ	廃棄物バスターズ
	18	新規・継続	8年(2013～)	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
	19	新規・継続	3年(2018～)	Jesuit House Project	Jesuit House Project
	20	新規・継続	5年(2016～)	座・沖島	座・沖島
	21	新規・継続	-	オオリヤロウ	男鬼里山集落再生プロジェクト
	22	新規・継続	17年(2004～)	未来看護塾	未来看護塾
12:31～12:35	終わりの挨拶				
13:15～14:30	審査会				

<プレゼンテーションの様子>



1-4 新型コロナウイルスへの対応

地域での活動を主体とする近江楽座は、2021年度も新型コロナウイルス感染症の影響を受け、活動の制限を余儀なくされた。

感染拡大の影響で5月26～28日、3日間全学休校となり、課外活動も禁止され、当初5月29日の予定していたプレゼンテーション・審査会を少し遅らせて6月13日に実施した。また、学生たちの活動にとって大切な夏休み期間の8月には新型コロナウイルスまん延防止等重点措置が適用されたため活動が制限、さらに8月27日から大学活動レベルが引き上げられたことによって、オンラインの活動のみに制限された。

後期授業が始まった10月4日からようやく通常通りの活動が行えるようになったが、年明けから再び全国的な感染拡大により、活動における感染リスクを軽減する注意喚起を行いながら、活動を進めてもらうこととなった。

Ⅰ 活動指針

近江楽座では、「新型コロナウイルス感染拡大防止のための近江楽座活動指針」(87ページ参照)を踏まえ、感染拡大防止を図ってもらうとともに、コロナ禍・コロナ後の新しい取組も期待した。

Ⅱ 活動計画・実績報告書の提出

毎月に活動計画、実績報告を提出。活動実施についての許可や必要な指導を行った。

< 2021年度の事業実施日程 >

日程	行事
4月19日～5月17日	プロジェクト募集
4月21～23日	2020年度活動成果報告会開催
5月26～28日	新型コロナウイルス感染拡大のため全学休校、課外活動の禁止
6月13日	令和3年度プレゼンテーション・審査会
6月18日、22日	審査結果発表<22プロジェクト採択>、活動説明会・プロジェクト活動開始
7月9～26日	プロジェクト追加募集
7月29日、8月5日	追加募集プレゼンテーション・審査会、結果発表<1プロジェクト採択>
10月18,20～22,25日	助成金中間ヒアリング
11月20日	キャンパスSDGsびわ湖大会(オンライン開催) 学生知事対談(1チーム参加)、パネル展示(18チーム出展)
12月14～17日	中間報告会開催
3月1～7日	助成金最終ヒアリング
3月15日	活動実績報告提出

2 各プロジェクトからの活動報告


2-1 活動実績報告

01	政所茶レン茶 [®] ー	12
02	県大ラジオ部	14
03	とよさと快蔵プロジェクト	16
04	BAMBOO HOUSE PROJECT	18
05	フラワーエネルギー「なの・わり」	20
S 06	あかりんちゅ	22
07	障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト	24
08	未来看護塾	26
09	とよさらだプロジェクト	28
10	沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト	30
11	Taga-Town-Project	32
12	廃棄物バスターズ	34
13	犬上川竹林整備プロジェクト	36
14	たけともミライ	38
15	座・沖島	40
16	おとくらプロジェクト	42
17	内湖の再生と地域の水辺コーディネート	44
18	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	46
19	地域博物館プロジェクト	48
20	Jesuit House Project	50
21	男鬼里山集落再生プロジェクト	52
22	お山さんありがとさん	54
23	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-	56

S : Sプロジェクト

次ページ以降のチームデータについて
補足説明

※近江楽座活動年度について

 : 不参加

 : 参加

を示しています

※メンバー数は、活動に関わった学生の
総数です。

01 政所茶レン茶^㊿



政所茶を通じて楽しく地域活性化！！

滋賀県東近江市政所町において茶畑を借り、学生が自分たちでお茶を生産し、販売することで、地元の方と協力しながら地域を盛り上げるべく、楽しく活動しています。政所や奥永源寺地域で魅力を発見し発信しています。

TEAM DATA

チーム名:	政所茶レン茶 ^㊿
代表者:	森井由希 (人間文化学部)
メンバー数:	27名
指導教員:	上田洋平 (地域共生センター)
活動場所:	滋賀県東近江市政所町
関係団体:	政所茶縁の会
近江茶座活動年度:	2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020

PROJECT

実施事業

(1) お茶の生産

★見出し写真：茶摘み (05/15)

(2) お茶の販売



びわけんカーニバルでの販売 (07/11)



よびし市での販売 (11/21)

(3) 近江兄弟社高校でのPR活動

1年のまとめ・考察 (成果と課題)

今年度も昨年度に続いて新型コロナウイルスの影響で、例年と比較すると活動する機会が大幅に減少してしまった。この状況の中で集まって作業することが難しく、ごく少数で作業をすることも多かった。また、毎年行っている、茶レン茶^㊿園の所有者である白木駒治さんのお手伝いや年末の交流イベントの開催も難しく、地域の皆さんとの交流する機会がほとんど持てなかった。

販売においては参加を予定のイベントが中止になる中で何とかお茶を皆さんにお届けできないかと考え、昨年度一時休止していたインターネット通販をバージョンアップし、再開することにした。多くの方に政所茶や茶レン茶^㊿の活動を知っていただき、リピーターの方々にもご購入いただいた。これまでは、ほとんど対面での販売のみだったこともあり遠方のお客さんにお茶をお届けすることが難しかったが、通販を始めたことで県内外の多くの地域の方に継続して政所茶を味わっていただくことができるようになった。販売イベントも、中止が重なる中、これまでお世話になってきた方々にお声がけいただき、昨年度よりは多く参加することができた。茶レン茶^㊿として政所の知名度向上や魅力発信に寄与することができ、自分たちの活動を政所地域に還元できたと思う。

また、商品開発の面では、パッケージを一新し、よりスタイリッシュなデザインにした。このことにより、これまでの購入者層は中高年やお茶好きの方だったのが、若い世代やファミリー世代にも親しみを持ってもらい、手に取っていただくことが格段に増えた。政所茶だけでなく、お茶を知っていただけたという点で魅力発信に貢献できたのではないかと思います。今年度の経験を生かし来年度もさらに多くの方に手にとってもらえる商品作りをしたい。

活動を通して学んだこと

私たちが飲んでいるお茶ができるまでに、茶葉を摘むだけでなく、肥料をまいてススキをしき、加工して袋に詰めるといった多くの手間暇がかかって、今手元にあるということが身にしみてわかりました。

田代帆華（生物資源管理学科 1 回生）

今年も昨年と同様にコロナ禍での活動となり、販売機会や地域交流の減少など苦労もありました。一方でパッケージの新調、ティーパックの販売といった新しいことを考え、実践していくこともできました。3年間、大学の授業だけではあることのできないとても貴重な経験ができたと思います。

林綾音（生物資源管理学科 3 回生）

茶レン茶[®]の活動を通してお茶に対して親しみを持つようになり、ペットボトル以外のお茶を飲むきっかけになりました。また、住んでいるだけでは分からない滋賀県の魅力を知るきっかけにもなりました。お茶摘みはなかなか経験できるものではないので、地味な作業ではあるものの記憶に残るような経験になりました。

平田祐一（生物資源管理学科 3 回生）

「例年通り」の活動ができず苦しむ年だった。そんな中でも、できる範囲で最大限の活動をしようと新たなことにチャレンジする機械になったと思う。能動的に動くことで、それぞれの活動のモチベーションにもつながった。

森井由希（地域文化学科 3 回生）

地域からのコメント（抜粋）

茶縁の会 山形蓮さん

今年度はコロナ禍で思うように活動ができない中、こまめに畑に通い、ここ数年の中ではかなり管理の行き届いた茶畑を維持してくれていると思います。ただ、コロナによって地域住民との交流の機会が持てていないことが気になります。対面ではない手段で地域とコミュニケーションをとる工夫も今後してより活動内容を充実させていってもらえたらと期待しています。

紅葉尾町自治会長・政所茶生産振興会事務局長 福井肇さん

数年前、茶畑に敷く草（ススキ）についての相談を受け運搬を引き受け、付き合いが始まりました。数年間耕作放棄地で手付かずだったススキ畑に学生さんが入り、近くの方も一緒に作業をされ、景観がずいぶん良くなりました。若い人たちのひたむきな活動は地域住民に「まだまだがんばろう」、「この地域の良さを生かしていこう」という思いを抱かせてくれます。今後も政所町や紅葉尾町だけでなく奥永源寺地域で活躍されることを期待しています。

指導教員より（抜粋） 地域共生センター 上田洋平

2021年の年度末現在、世間は未だコロナ禍の中にある。コロナによって奪われた学びの機会は大きいですが、そんな中でも地域と関わり地域で活動しようという志を持つほどのみなさんは、このコロナ禍からも多くを学ぶことのできる人たちだと信じる。脱コロナ禍、あるいは、with コロナへのシフトが始まっている。国内では都市から地方へのシフトがよいよ顕著になるであろう。地方でリモートワークを行うことが可能になり、通勤などに充てていた時間を地域貢献型の副業に充てる「スキルシフト」が加速していく。政所茶レン茶[®]をはじめ、近江楽座の活動は、まさにそういう地域貢献志向の社会人の受け皿になり得る。そうした人たちとつながりをつくとよい。心配なのは、学生世代間の経験の伝達がうまくいっているかどうか。お茶の栽培から販売を中心とする地域活動の「一仕事」の感覚や地域との関係を、どのように継承するか、工夫してほしい。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・活動参加者の体調チェック
- ・ソーシャルディスタンスの確保
- ・マスク、手袋の着用
- ・換気の良い場所での作業
- ・作業後の手洗い
- ・人の集まる時間帯を避けての活動
- ・県外からの参加者の制限

DELIVERABLE

成果物／制作物



お茶

02 県大ラジオ部



県大と地域を繋げる見つけるラジオ！

地域と大学をテーマとした番組を制作しています。番組を制作すること、聞くことを通して、彦根の街と県大の相互理解を深めること、そして新たな出会いや発見を制作することを目標としています。スマホアプリ stand.fm で県大ラジオ部と検索してください。

TEAM DATA

チーム名：	県大ラジオ部
代表者：	二輪百合子、中村祐衣香（人間文化学部）
メンバー数：	28名
指導教員：	秋山毅（工学部）
活動場所：	学内、彦根市
関係団体：	エフエムひこねコミュニティ放送株式会社
近江楽座活動年度：	2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020

PROJECT

実施事業

(1) 番組制作「県大 zine LIFE」

★見出し写真：県大 zine LIFE (03/05)



県大 zine LIFE (07/20)

(2) 番組制作「まち☆スタ」

(3) ラジオワークショップ

(4) えびす講公開放送



えびす講 (11/20)

(5) 自己紹介収録企画

1年のまとめ・考察（成果と課題）

一年間という短い活動期間で公共の電波である FM 放送の枠を確保することができ、実際に制作した番組を放送できたのは大きな成果である。部員数も 30 人と多く、ラジオ制作への興味関心の高さがうかがえる結果となった。また、コロナ渦で活動が大幅に制限される中、取材に行ったり収録したりする機会を多くとることができ、放送枠を落とさずに放送できたことは良かった。

一方で、今年度から始めたプロジェクトであることもあって、収録内容の企画から放送までの流れをスムーズに行うことが出来なかった。また、収録した内容を編集出来る人が少なく、仕事が偏ることがあった。コロナ禍の影響で参加人数が少なく、収録までの流れや編集方法の伝達が上手くいかなかった。行動範囲の制限もあるので大人数での移動を伴った収録が出来なかった。放送にあたって、エフエムひこねさんやその他のラジオアプリで聞いて頂いたリスナーの方々の感想があまり聞けておらず、放送内容の良い点悪い点のフィードバックがあまり行えなかった。これらの課題を解決するために今後、企画から収録までのフローチャートを作成し、大まかな流れを全体で理解して分担作業の担当者の割り振りなどを円滑にしたい。また、リモート収録など遠方の方でも参加出来る収録を行って放送内容を増やすこと、リスナーの意見を聞くために各ラジオ放送アプリにて収録内容を公開し、コメントを募るなど積極的に行っていきたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

ラジオにおける聞き手の振る舞い方を学べたことがとても有意義でした。話し手が話しやすい状況や雰囲気を作ることが聞き手の役割で、「はい」か「いえ」で答えられる単純な質問から聞いたり、話し出しをあらかじめ決めてあげたりすると、話し手が緊張せずに話せるのだと身を持って感じました。こういった技術はラジオに限らず、人とのコミュニケーション全般で意識しておいて損はないものだと思います。

大串理竣 (環境建築デザイン学科1回生)

どうすればリスナーの人に私たちのラジオに興味を持ってもらえるのか、聞いてもらうにはどうすればよいのかを考え、その通りに伝えるという過程が一番難しく感じました。また、取材や編集の仕方など学ぶことが多く貴重な経験をさせていただきました。もっと彦根銀座街の魅力を発見していけるように精力的に活動していきたいです。

二輪百合子 (国際コミュニケーション学科3回生)

初めてラジオ番組の企画をやってみることになり、番組構成や編集等、知らないことだらけだったからこそ、どうすれば聞いている人に伝わるラジオになるか、どのような流れにすればゲストの方が話しやすいか、などを一から考えて番組を作り上げていく経験が出来ました。県大や彦根で活動しておられる方々の情報を積極的に集めるようになったため、日常生活でもより広い視野を持って、様々な「魅力」に気がつくようになりました。

石堂文菜 (電子システム工学科1回生)

地域からのコメント (抜粋)

本と珈琲 六月の水曜日店主 宇野 爵さん

かつては彦根の商業の中心として賑わった銀座商店街も今ではシャッターが目立つようになってしまいました。そんな場所を地元の県立大学の学生さん達に活動の場として選んで頂けたことを嬉しく思います。僕自身この商店街の可能性を信じていますが、何かと障壁が多いことも事実です。人と地域を繋ぐ交流や情報の発信をテーマに掲げ、商店街の各店舗への取材などを通して今まで見えていなかったことが少し可視化され、商店街も一歩前進めたように思います。立命館大学の阿部先生のゼミとの交流戦や、FM彦根のサテライトスタジオとしての活用など、今までになかった新しい商店街のカタチも見せて頂けました。こういった活動が途切れず継続されればいいと思います。

指導教員より (抜粋)

工学部 秋山毅

今年度から立ち上がった活動であるにも関わらず、大胆に幅広い活動を行うことができた。

活動開始時の顔合わせ、意見交換の場では、それぞれの立場や経験に基づく多様な意見、希望、アイデアが活発に出されていた。なにかしたい、なにかを残したい、という部員諸氏の気持ちを強く感じた素晴らしい時間でもあった。

感染症対策による活動の制限があったものの、オンラインでもできることが多くあったことは幸運であった。特に部員同士の相互インタビューに基づく番組制作は、部員それぞれの共通経験の仕掛けとしても、話術・技術の向上の場としても、とても良いアイデアで、継続的に繰り返し行うと良いように思う。

秋以降は、彦根銀座商店街をはじめとして、徐々に学外に出ていけるようになり、番組の制作や銀座街での生放送を通して「地域と大学をつなぐ」ことを実際に始めることができ、多くの学びと自信が得られたと思う。地域と大学をつなぐ活動の頻度をいっそう高めることは重要であろうし、ラジオ番組として「話術・技術・構成・演出」などには、まだまだ大きな伸びしろもある。とりわけ、広い意味での「聴き手」を意識する視点がより重要となろう。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・ラジオ放送の宣伝やラジオ部の活動をSNSにて適宜発信
- ・Zoomなどのオンラインツールの使用
- ・状況に応じて、オンラインと対面での活動の切り替え
- ・県を跨ぐような移動、活動の自粛
- ・少人数での取材活動、車や自転車等での移動

DELIVERABLE

成果物/制作物



ラジオ部チラシ

03 とよさと快蔵プロジェクト



古民家改修でまちを元気に

豊郷町には使われなくなった民家や蔵が点在し、課題となっています。私たちは空き家というまちの資産を学生の発想を生かして改修しています。古民家の改修だけでなくとまらず地域のイベントへの参加やイベント企画、蔵を改修した Bar 運営など幅の広い活動を行い、まちの方と共にまちを盛り上げています。

TEAM DATA

チーム名：とよさと快蔵プロジェクト
 代表者：川崎恵李（人間文化学部）、岩田禪人（環境科学部）
 メンバー数：76名
 指導教員：迫田正美（環境科学部）
 活動場所：滋賀県犬上郡豊郷町
 関係団体：NPO 法人とよさとまちづくり委員会
 近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
 2020

PROJECT

実施事業

- (1) たく庵改修事業
★見出し写真：改修の様子（10/31）

- (2) 個展「快蔵のおすそわけ」



「快蔵のおすそわけ」展示（08/20）

- (3) 町のイベントへの参加



酒蔵祭り（11/27）

- (4) タルタルーガ営業再開

- (5) 冊子「カイズウノススメ」作成

1年のまとめ・考察（成果と課題）

今年一年の活動を振り返り、コロナ禍という状況下にもかかわらず多くの活動ができたことを成果として実感しました。またそれと同時に、まちの人とのコミュニケーションをとることの難しさを課題として感じました。

今年度、私たちはコロナ禍における活動体制を見直し、安全に活動ができる体制を模索しました。新しい企画を考案したり、工夫して作業したりするなどして、実際に多くの活動を行うことができました。

しかし地域に入って改修やイベントは行うものの、まちの人と直接的に関わることはあまりありませんでした。まちを歩いている際にたまたままちの人に声をかけられ会話し、作業していることやイベントをしていることは認知されていましたが、どんな人たちが何のためにやっているのかまではなかなか伝わっていない様子でした。メンバーの入れ替わりが激しいという学生の性質や、コロナ禍で活動がストップしてしまい町と関わることでできるイベントが激減してしまったこと、快蔵プロジェクトと町をつなぐ人が引退し、なくなってしまったことなども原因の一つとして挙げられます。しかし私たちの活動は町と密接に関わっており町の人の協力なしでは行えません。

過去の活動を振り返ってみると、イベントなどでメンバーとまちの人が仲良くなっている様子が数多く見受けられましたが、現在ではプロジェクト発足時にはあったはずの町との関係性が薄れています。時が過ぎるごとにまちの人たちの求めるものは変わっているはずなのに私たちの行動は10数年特に大きな変化をしていません。このままでは私たちがまちに寄り添うことなく独り歩きしていくようになる可能性もあります。このことから、地域に入る学生団体はプロジェクトを引き継いでいくことの重要性よりもまちの人との関わりを引き継いでいけるような在り方を目指すべきであるように感じます。コミュニケーションを密に取り、まちの人に対等な立場として意見をもらえるようになって初めてこのとよさと快蔵プロジェクトが成り立つのではないかとこの1年間で感じました。

活動を通して学んだこと

主體的に動くことの楽しさを学ぶことができました。特に、快蔵のおすそわけでは、古民家と食器を使い独創的に展示をすることができ、とても有意義な活動を行うことができました。自ら考えて動くことでより楽しい活動ができると学び、これからの活動でも主体性を大切にしていきたいと思いました。

尾崎梨帆（生活デザイン学科2回生）

この活動でモノの価値を学びました。空き家は世間一般では処理の困るモノですが、私たちからすれば宝のように見えます。このように現状、私たちが不必要だと感じるものでも少し視点をズラしてみることで価値観が大きく変わるきっかけにも知れませんが。

岩田禪人（環境建築デザイン学科3回生）

私が本格的に参加し始めたのは昨年の10月からであったが、約半年間で豊郷町で開催された酒蔵祭や豊郷雛巡り、改修作業などを体験し、豊郷町の人や各所の魅力を直に感じることができた。この実際に行かなければ体験できない豊郷町の魅力を、活動を通して町の方とさらに広め、向上させていきたい。

築山銀冬（環境建築デザイン学科2回生）

この活動を通して、どんな状況でも、見方を変えれば新しい発想をくれるスパイスになるということを学んだ。まず空き家を活用するにあたりこの考えは必須だ。また今年度の活動において制限が多い中でどのような活動ができるかを考えるにあたり、状況をポジティブに捉え直し、今何ができるかを考えることの大切さを学んだ。

川崎恵李（生活デザイン学科3回生）

地域からのコメント（抜粋）

NPO 法人とよさとまちづくり委員会 副理事長
岡村博之さん

コロナ禍で多くの活動が制限されるなか、豊郷町に大きな影響を与え続けてくださっている学生の皆さんは、ギリギリの活動を続けてくれました。特に、まちづくり委員会、豊郷町観光協会、吉田区を始め、各地区の事業の運営には欠かせない存在です。またここ数年、活動してくれたOB・OGが、このまちに残り、仕事としての活躍ぶりがまちの原動力になっています。OB・OGと共に現役学生の活動は、コロナ禍収束後、地域力が重要な時代に、永年関わり地域を知って活動を続けて来た結果、大きなずれが無く、即戦力として結果が出るかと期待しています。

指導教員より

環境科学部 迫田正美

昨年度から続く新型コロナウイルスの感染拡大により通常の活動が難しくなった中で、新たな活動の場を広げることにもトライできているのは心強く思う。

快蔵プロジェクトは長年の活動の中で築いたコアミーティングと定例会の運営や情報伝達と班ごとの協力体制などを活かして、2年間継続した困難な状況の中で後輩へ活動の楽しさや意義を伝えることにも注意してほしい。

ウィズコロナの期間が当分、継続する可能性が高い中で、活動のベースは確立できている一方で、感染対策を引き続き厳しく守っていくことを忘れずに、これまでの経験を上手く後輩に伝えるとともに、新しい体制になっても同様の困難を乗り越えられるような工夫をチーム全体で検討し、共有することできるように工夫してほしい。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・コロナ禍でも十分な活動ができる新たな企画・個展「快蔵のおすそわけ」の考案
- ・日常的な感染防止対策の徹底
- ・地域の方と相談、十分な理解を得た上で活動
- ・毎月の定例会におけるリモートの併用

DELIVERABLE

成果物／制作物



「快蔵のおすそわけ」ポスター



「カイズウノススメ」冊子

04 BAMBOO HOUSE PROJECT



生きる自然は地域を育む

全国、どこにでもある放置竹林。この問題を地域の方々と学生が協力して解決しようという取組です。滋賀県湖南市菩提寺区の竹林で、毎年竹林整備を行い、その際に出た竹廃材を再利用し、子どもたちや地域の方々が集まる憩いの場となることを目指します。

TEAM DATA

チーム名:	BAMBOO HOUSE PROJECT
代表者:	佐藤允哉 (環境科学研究科)
メンバー数:	45名
指導教員:	陶器浩一 (環境科学部)
活動場所:	滋賀県湖南市菩提寺
関係団体:	菩提寺まちづくり協議会
近江楽座活動年度:	2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020

PROJECT

実施事業

- (1) 竹廃材の撤去 (竹チップ制作)
- (2) 週末 WS



テージ床仕上げ材取り付け (12/11)

★見出し写真：ハンモックにて地元の子どもたちと学生の交流 (11/20)

- (3) 竹林整備



竹林整備の様子 (11/19)

- (4) ポートフォリオ作成
- (5) サイン計画

1年のまとめ・考察 (成果と課題) (抜粋)

新型コロナウイルス感染症の影響により例年通りの活動を行うことが難しく、思うように活動ができなかった。そのような状況の中でも感染症対策を徹底しながら活動をし、例年通り行えないことは、来年度に向けてできることを最大限行った。

バンブーハウス2号は、老朽化により性急に補修作業を行わなければならない緊急性の高い状況であったため、週末WSは泊まり込みでの作業となった。作業中には、消毒・マスクの着用や時間ごとの検温など、施設では常時換気・広い部屋を使用しソーシャルディスタンスの確保など感染症対策を徹底し、また、その旨をまちの方々に伝え協議し、賛同していただいた上で、11月12月は例年通り宿泊を伴う週末WSを行い、無事作業を終えることができた。

甲西北中学校との合同竹林整備や環境学習講話などは感染状況を考慮し断念することになったが、来年度に向けて、受け継いできた地域との関わりを終わらせないように引き継いでいけるようにしていきたい。

「竹の庭」に関しては、竹の生え変わり周期と呼ばれている8年が過ぎ、バンブーハウスは生きた竹を躯体としているため、躯体が枯れる可能性も高い。プロジェクト発足当初に制作された竹建築の老朽化によりバンブーハウス1号は昨年度に全解体され、バンブーハウス2号は象徴化することで人が入ることのできないようにするなど、今後、他の竹建築をどのタイミングで補修、解体し再構築するのか地域の方々と共にしながら検討し「竹の庭」全体の姿をどのように変化させていくかを改めて計画する必要がある。

活動を通して学んだこと (抜粋)

私は、製図室に掲示されていたポスターを見て、自然の中での作業や普段関わることのできない竹林での作業に魅力を感じたため参加した。このワークショップに参加し、そもそも日本において竹が使われることが少なくなっており、そのことから竹林が放置されたり、荒れているという現状とそれを少しでも改善していく方法を学べたのではないかと思う。

小田龍斗 (環境建築デザイン学科1回生)

荒れた竹林をきれいにするため竹を活用して色々つくるということに、自分が興味のある間伐材の活用にも繋がるものがあるのではないと思い参加しました。竹林が荒れてしまった経緯や竹の見分け方、これまでの作品の構造の説明などをしてもらって、多くのことが学べ、いい経験になったと思います。また参加したいです。

河野麗 (環境建築デザイン学科1回生)

以前参加した時に、暗かった竹林に日差しが差すことに爽快感を感じた。今回のワークショップでは、腐敗した竹にも意外と芯があり、足場としては利用可能であることを学ぶことが出来た。また、「人の手で竹林はかっこよくなる」ということも再度学ぶことができた。先輩方の代から続く竹林整備に自分も携わることができて楽しかった。

田中滯梨 (環境建築デザイン学科2回生)

地域からのコメント (抜粋)

菩提寺まちづくり協議会 地域活性化委員会 委員長

浅井基義さん

平成24年度から菩提寺まちづくり協議会が借用・管理している区の竹林に、滋賀県立大学の皆様と共同で始めたバンブーハウスプロジェクトも9年が過ぎようとしています。

今期も、新型コロナウイルスの影響で思うような活動が出来ない年になったかと思いますが、皆様のご協力で施設の維持管理が出来ております。解体した1号機後にハンモックの新設、2号機も補修してオブジェとして残してもらいました。スクリーンデッキの補修と、ブランコを新しく付け替えていただき、子どもたちが喜んでます。12月のWSの時に区長が竹林を見学されました。今期は個人の所有地の竹も伐採してほしいという依頼があり、委員会と共同で伐採を行いました。竹林を綺麗に整備してもらい感謝されております。ほぼ毎日の事と思いますが、地元の子どもたちが、竹林に遊びに来ています。休みの日には、家族で遊びに来ている所もよく見かけます。

指導教員より (抜粋)

環境科学部 陶器浩一

今年度もコロナ感染状況をみながらの活動であった。地元中学校との交流(中学校に出向いての講義講演、および竹林での演習)は叶わなかったが、現地での活動は行うことができた。主に秋期に現状調査、および今年度実施可能な現地作業を協議した。その後行ったワークショップでは多くの参加希望者がいたが、密を避けるため人数を調整して複数回に分けて分散してワークショップを行なった。傷みの激しかった部位の撤去、取り換え、新たな遊具の新設などを行い、今後の全体計画のマスタープランを地域の方々とも協議した。

来年度は是非地元中学校との交流も復活させ、この場所と地域の未来図の実現に向けて、活動を途絶えさせることなく続けていってほしいと願っている。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・地域の方々と複数回協議を重ね、賛同いただいた上で宿泊を伴う作業を実施。
- ・オンラインによる分担作業(ポートフォリオ作成、サイン計画など)

DELIVERABLE

成果物/制作物



ポートフォリオ

05 フラワーエネルギー「なの・わり」



資源循環型社会のモデル化

化石燃料に代わり、植物を育てるところからバイオディーゼル燃料を生産、使用することで資源循環型社会を形成することを目標に活動を行っています。また科学実験教室や出前授業を開催し、子どもたちに科学の楽しさやエネルギーについて知ってもらおう活動をしています。

TEAM DATA

チーム名：フラワーエネルギー「なの・わり」
代表者：村瀬友規（工学研究科）
メンバー数：21名
指導教員：山根浩二、河崎澄、出島一仁（工学部）
活動場所：学内、彦根市（石寺町）
関係団体：菜の花プロジェクトネットワーク
近江菜座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

(1) 菜の花・ひまわり栽培

★見出し写真：菜種採取（05/18）



学外畑で菜種まき（11/17）

(2) 子ども向けイベントへの参加、開催



ヤンマーミュージアムでイベント参加（08/13）

(3) 高大連携授業への参加

(4) ブログやインスタグラムでの広報活動

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

菜の花・ひまわり栽培では昨年度の課題を複数解決できました。ひまわり栽培は昨年度コロナの影響で全くできませんでした。今年度は畑の整備から収穫まで、すべてやりきることができました。種も十分量収穫できたため満足しています。また、小型で使い勝手の良い草刈り機を購入したため、多くの部員が空き時間に雑草を刈ってくれ、工学部棟内の景観維持にも一役買ったのではと思います。2年前に終了した学外畑での活動も、場所を変えて再開することができました。課題としては、必要な肥料の種類や配合、適切な畑の大きさなど、栽培に関する技術面の引継ぎがうまくいっていないように感じます。子ども向けイベントでは、コロナ下でありながら、主催者の方から多くのお声掛けをいただきました。

1年を通しての反省点としては、小学校への出前授業ができなかったことです。例年、春ごろに地元の小学校を中心にアポを取り、小学校で環境に関する授業や搾油体験等を行っていました。しかし今年度は、アポを取るタイミングが遅れたり、コロナの影響もあり、小学校へ足を運ぶことはできませんでした。また、積極的に参加してくれる部員とそうでない部員の差が大きいことも課題として挙げられます。来年度は部員全員が活動に参加できるように日程を決めたり、モチベーションが向上するような楽しい企画等も考案していく必要があると感じます。来年度以降、引き継いでくれる部員には、今年度できなかった搾油機の購入や出前授業をはじめ新たなイベントの企画や参加をしてほしいと思います。また、なのわりの活動をより一層世の中に広められるよう、広報活動を頑張ってください。

活動を通して学んだこと

学外の畑が広く畝作りや種植えに一苦労したが、終わった後に達成感があった。しかし、学内畑では雪のせいもあり生えてこなかったため、植物を育てる難しさを痛感した。また、ワークショップでスライム作りを行った際に、小さい子どもたちが笑顔で作ってくれていたのがとても嬉しく感じた。

金山翔太（機械システム工学科4回生）

シャベルを使って土を耕して畝を作り、その畝に種を蒔き、定期的に草むしりをする作業はとても大変だった。しかし、菜の花が綺麗に咲いた様子を見ると得も言われぬ嬉しさを感じ、頑張った甲斐があったと思った。それと同時に地域の方々のご協力の有難さをひしひしと感じた。

勝間航平（機械システム工学科4回生）

地域の方々や施設の方々と交流することでいろいろな方に滋賀県立大学を知っていただけたと思う。その方々と話したり一緒に活動するのはとても楽しかったし、いい経験になった。

清川駿（機械システム工学科4回生）

他の人たちと一緒に作物を育てるのは楽しかった。土を耕したり草むしりをする作業は大変だったが、作物が育っていく様子を見ると、やりがいを感じた。また、エネルギー資源を自分たちで一から作れる体験はとても貴重なものとなった。

小西諒英（機械システム工学科4回生）

菜の花やひまわりを育てることを通じて、農作業の大変さを実感しました。天候や土の状態が植物の成長にすぐ影響するので、とても難しかったです。しかし、この活動を通じて植物からエネルギーを生み出すまでの過程を勉強することができ、とてもいい経験になりました。

山口紋暉（工学研究科機械システム工学専攻1回生）

地域からのコメント

MOP LABO Shiga Ryuo コミュニティスペースマネージャー

深尾善弘さん

竜王アウトレットのコミュニティスペース「MOP LABO」で親子向けの体験教室を開催いただきました。平日の午後というお客様の少ない時間帯でしたが、お子様の興味をひきやすいスライム作り体験などで、通りがかった親子連れの方の多くが参加されていました。場所の特性をうまく押さえたいうえで企画をいただいております。スペースの運営者としてはありがたい限りです。今後もスペースを活用いただき、良い形で一緒できることを楽しみにしています。

指導教員より

工学部 山根浩二

本年度は、これまでの稲枝で実施していた菜の花栽培に代わって、新たに下石寺で菜の花栽培を始めることになり、畑づくり、種まきなど規模もこれまでより大きくなり大変だったのではないのでしょうか。また、年末の記録的な大雪の影響も生育に出ているのではないかと思います。一方、順調だった学内の菜の花の芽が、大雪で圧死してしまい、春に黄色の花が見られないのが残念ですね。子ども向けイベントについては、コロナ禍の中で実施できたのは幸いでしたが、今後、本年度依頼がなかったエネルギー教育の出前授業を含め、イベント等のあり方、実施内容・方法などを考えてゆく必要があるかと思います。

工学部 河崎 澄

今年度は、下石寺地区の皆様との新たなつながりのもとで、菜の花栽培を通じた様々な学びがあったようですね。また、高大連携授業やヤンマーミュージアム、アウトレットパーク滋賀竜王での子ども向け科学実験を順調に再開できたことは大きな成果だと思います。コロナ禍による一年間の空白期間後の事業再開は苦労も多かったと思いますが、その分学びも多かったのではないのでしょうか。今後の活躍に期待します。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・屋内にて行われる活動についての規制や制限の設定
- ・交流する相手方への注意喚起、全員の意識共有
- ・ミーティングは原則オンライン

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



イベントのピラ



菜種

<その他成果物>

ひまわりの種



エコでスローな夜を

お寺などから使えなくなったろうそく、「残ろう」をいただき、それを再利用してリサイクルキャンドルを作り、キャンドルナイト、キャンドル作り教室、キャンドル販売などを行っています。自分たちで運営資金をまかない、独自予算で活動している唯一のSプロジェクトです。

TEAM DATA

チーム名：	あかりんちゅ
代表者：	極壇雛（人間文化学部）
メンバー数：	29名
指導教員：	平山奈央子（環境科学部）
活動場所：	学内、彦根市、滋賀県内 他
関係団体：	滋賀教区浄土宗青年会
近江楽座活動年度：	2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020

PROJECT

実施事業

(1) ブルーメの丘キャンドルナイト



キャンドルを並べる様子（08/08）

(2) このみやろうそく夜

(3) ヨシフェス

★見出し写真：キャンドルナイトの様子（11/27）

(4) キャンドル作り体験教室@三井アウトレットパーク

(5) 湖風夏祭

(6) 廃ろう回収

(7) ティーライトキャンドル製造委託

(8) ウエディングキャンドル製作

(9) 新入生向けクラブ紹介

(10) 作品展示@喫茶おとくらギャラリー輪々

(11) 彦根工業高校で活動紹介

(12) マイナビ学生の窓口「学生と考えるSDGs 特集」への記事提供

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度はコロナ禍前と比べても多数のご依頼を頂いた。静かに楽しむキャンドルの特性が情勢にマッチしていたのではないかと考えられる。また、三井アウトレットパークのフリースペースをお借りしてのワークショップや、ギャラリーをお借りしての作品展示など、より多様なイベントを開催できた。特にワークショップでは情勢を考慮して接触を減らせるように方式を変更し、結果としてスムーズな対応が可能になり、今後にも活かせると思う。ご依頼としても環境問題に配慮したイベントに多く参加させて頂けたため、「エコでスローな夜を」広めるにあたって、意義のある活動であった。

新入生については10人もの加入があり、総数約30人という大所帯となった。しかし依然として参加メンバーの偏りが見られ、仕事の割り振りなどで負担を分散させる工夫が必要と思われる。そこで、次代は役職を増やしたうえで現一年生にも仕事を割り振り、メンバー全員が活動内容を把握できるようにしていきたい。SNSでの発信に関しては、更新頻度等にバラつきが出てしまったTwitterとInstagramの担当者を統一することで、双方が連動するようになった。

昨年度から課題として挙げていた新商品の開発に関しては、一般でキャンドルの製作・販売を行っている方にお話を伺うことができ、商品のアイデアを頂いた。また、その流れで新しく、廃花問題を扱う高校生の環境団体とのつながりもつくることができた。アイデアとしてはキャンドルナイトの際のオプション案や商品の販売方法なども頂けたので、Sプロジェクトとしてより発展的な運営につなげ、地域に還元していけることを目標とした。

最後に、活動をまとめた文書として、活動の流れや準備内容などをまとめた。現時点ではあかりんちゅ内部で引き継ぐ際に使える内容であるが、来年度から毎回の活動をしっかり記録することで、外部にも公開できるような内容に仕上げたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

製作体験・販売の活動では、小さい子どもに対してキャンドルの作り方を説明することが難しく、どのようにしたら楽しんで作ってもらうことが出来るか悩んだが、褒めたり、相手の気持ちに共感したりすることで、良いコミュニケーションを築くことができた。今後は、あかりんちゅの活動が環境に良い取組であるということをもっと発信し、多くの人とコミュニケーションをとっていききたい。

内片玲 (人間関係学科 1 回生)

今年度はキャンドル製作やキャンドルナイトだけでなく、アウトレットモールにてキャンドルづくりの体験会を行うこともでき、地域の方々と直接お話しする機会も多くなった。体験後に多くの方が笑顔になる様子を拝見したことで、私自身、あかりんちゅのメンバーの一人として礼儀等を見直し、来年度はよりよい関係をあかりんちゅを通して築きたいと感じた。

市榮 梨佳子 (環境政策・計画学科 2 回生)

今年度はキャンドル作り教室やキャンドルナイトに参加することができ、人と関わる機会が多かった。分からないことや不測の事態への対応の難しさを感じる場面もあったが、人の親切さに触れたり、笑顔を見ることができたりしたことで、対面で活動することの楽しさも感じる事ができた。あかりんちゅの活動に関わってくださる方々に感謝と笑顔を忘れずに活動していきたい。

藤井咲希 (地域文化学科 2 回生)

地域の人をはじめ、様々な人の温かみに触れることができた。また、ろうそくを買ってくれる人とのコミュニケーションのなかで少なからず自分が成長できたように感じる。ろうそくをどのように配置するか、どのように販売するかなどの視線を体感することもでき有意義な時間を持てたと思う。これからもあかりんちゅの活動を通して温かい気持ちになってくれる人が増えれば良いなと思った。

二輪百合子 (国際コミュニケーション学科 3 回生)

地域からのコメント

滋賀農業公園ブルーメの丘 川村桃子さん

新型コロナウイルスの影響や、天候不良のため度々延期となってしまいましたが、皆様のご協力もあり無事にキャンドルナイトイベントを開催することができました。ご来園いただいたお客様にも大変喜んでいただけました。特に、キャンドルを並べて作っていただいた羊や星はお子さまにも大好評でした。廃ろうそくを用いたキャンドルイベントはただきれいだけでなく、SDG sについて考えるきっかけ作りにもなり、とても素敵な活動であると思います。また機会があればぜひよろしくお願ひいたします。

指導教員より

環境科学部 平山奈央子

昨年度とは異なり、コロナ禍でありながらも工夫して活動できたようでした。良かったと思います。特に外部の方からの依頼については、先方の不安もあったと思いますが期待に応えることができ、活動メンバーそれぞれに学びや反省があったのではないのでしょうか。限られた環境の中で工夫しながら活動を進めることは、残りの学生生活においても、社会で働く際にも役に立つ経験になると思います。活動メンバーの規模や多様性も広がったとのことで、組織運営や活動内容の見直しや継続を考える必要が出てくるかと思えます。もちろん1年ごとの目標や活動計画はあると思いますが、社会貢献、地域貢献を考えた場合に、あかりんちゅが解決したい課題は何なのか、その課題は地域の現状に合っているのか、大きな課題の中であかりんちゅが貢献できる部分はどこなのか、などについて活動メンバーで話し合ってみることも重要かと思えます。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・SNS での積極的な情報発信
- ・ワークショップで接触が起こらない工夫 (レーンをつくる)

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



オリジナルキャンドル

07 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト



モットーは「無理なく、楽しく！」

障がい者を有する人と学生が互いに成長することを目的に、NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディーの支援活動を行っています。活動を通じて、障がい児・者を支える地域づくりを推進することも目指しています。

TEAM DATA

チーム名： ボランティアサークル Harmony
代表者： 佐野文亮 (環境科学部)
メンバー数： 19名
指導教員： 中村好孝 (人間文化学部)
活動場所： 学内、彦根市、東近江市
関係団体： NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

(1) 定例活動



定例活動の様子 (05/22)

★見出し写真：定例活動の様子 (11/20)

(2) 定例会議

(3) Harmony 学習会

(4) 「おとくら」作品展示会



ギャラリー喫茶おとくらで展示会 (08/07)

(5) 第19回 Harmony & Melody クリスマスコンサート 2021

1年のまとめ・考察 (成果と課題)

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、今年度もバス旅行やお泊り会、66祭りのほか多くの活動が中止となりました。そのような中でも、メロディーの子どもたちや学生は積極的に活動に取り組むことで、よりよい活動の場づくりに努めました。以前から行っていた屋外での制作活動は、単に気持ちの良い活動というのみではなく、新型コロナウイルス拡大防止にもつながること、より有意義なものとなりました。定例会議で Zoom を用いることで、参加や会議資料の共有を容易にしたことも、コロナによる好転だといえるでしょう。学生や教員、メロディーの方々がオンラインミーティングツールに慣れたことで気軽に参加できるようになったため、アフターコロナの会議もリモートで行ってよいのではないか、という意見が実現の方向に固まりつつあります。インターネットを用いた活動からは、コロナ禍でもクリスマスコンサートや Harmony 学習会といった行事の存続・実施に貢献する点で、新たな展望を見出すことができました。

それでもやはり、新型コロナウイルスによる多くの活動の中止は、特に引き継ぎにおいて大きな課題をもたらしました。前述したように、今年度は茶道や学内外のイベントがほとんど中止されています。それによって、イベントの詳しい内容やそれまでの流れを知っている学生がほぼ卒業してしまっているというのが現状です。特に湖風祭の出店などに関しては、手続きから当日の段取り、後片づけの手順も経験者がいなければかなり難しい活動になるといえるでしょう。とはいえ、Harmony には、メロディーの方々や卒業した Harmony メンバーとの交流が深いという特色があります。この関係を最大限生かしながら、例年の活動方針を細かいたところまで聞き、積極的に話し合うことで、現状維持ならびに改善へ繋げていくことを目指します。

活動を通して学んだこと

障害を持つ子ども達と触れ合うというのは今までになかった経験で、声の掛け方や乗り気じゃない時はどう接すればいいかなど、いろんなことを教えてもらえて、有意義な時間を過ごせました。彼らの絵を描くときの癖や個性が見られて、とても楽しいです。

西尾七虹（国際コミュニケーション学科1回生）

活動を通して準備を行うことの大切さを学んだ。準備時間が長くなると集中力が切れてしまう人もいるため、学生がテキパキ行動しなければならなかった。また、表情や仕草から参加者の求めることを読み取って確認するなどコミュニケーションは参加者に楽しんで活動してもらうために大切だと学んだ。

大谷瑞稀（人間関係学科3回生）

学習会で、学生がボランティアで障がいを持った子どもを支援する環境は珍しいということが分かった。自分では大した活動をしたという実感はなかったが、先輩方や親御さんの話を聞いて、ハーモニーでの活動が凄いいことだったのだと感じた。これからはメロディーの皆さんと楽しく活動していきたいと思う。

中村幸輝（機械システム工学科2回生）

私は、ハーモニーの活動で視野を広く持つことを学びました。周りをよく見ると、自分に出来ることが多くあることに気がつきました。今年度は、新型コロナウイルスの影響で活動が何度も中止になってしまったことを悔しく感じています。来年度は今年度よりも多く活動できたらいいなと思います。

吉岡玲奈（人間関係学科3回生）

地域からのコメント（抜粋）

NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー

西澤真志さん

ハーモニーのみなさんは、ZOOMやSNSなどを使いこなし、一緒に活動しているメロディーのメンバーは「すごいなあ」「さすが若いし、何でもできるね」と感心しきりです。会議はオンラインですが充実した話し合いができ、離れていても顔を見て活動の計画や準備をすることができました。2年連続のオンライン開催となったコンサートでは、吹奏楽部やアカペラサークルにも協力いただき、クリスマスの雰囲気たっぷりの楽しい時間を各家庭で過ごすことができました。今年度は、感染状況の落ち着いた時期をみて、油絵や粘土を創作する定例活動を6回開催することができました。これまでに活動で描いた作品が、今年度の「ぴかつtoアート展」で大賞と審査員特別賞を受賞することができました。何年も前から先輩たちがコツコツと積み上げてきた活動を、ハーモニーのみなさんがしっかりと引き継ぎ、大変な世の中にも関わらず途絶えることなく支え続けてくださったおかげです。感謝しています。

指導教員より

人間文化学部 中村好孝

学生がよくまとめた報告に、付け加えることはあまりない。自分が大学生だった時はこのようなしっかりした活動や報告はできなかったと、毎年思っている（zoomでの定例会議では、新型コロナ感染症や大学の状況の報告も含めて学生がいていないに司会してくれますが、司会以外の学生の発言が増えればもっと良いなど、私も思っていました。障がい児・者と一緒に活動するというのが、もちろん一番のメインではありますが、メロディーをはじめとする地域の方との連携に多くの学生が関わるのは良いことだと思います）。

今年度も新型コロナ感染症の影響は大きかった。クリスマスコンサートは再びオンライン開催になり、旅行は中止になった。しかし定例活動の回数が昨年度よりは回復した。来年度はさらに通常の活動が行えるようになることを願っている。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・マスクが着用できない子については、あらかじめ保護者に体調等を確認し、参加できそうだと判断した場合は許可
- ・定例活動：創作活動（油絵・粘土制作）を実施、茶道体験は中止。感染状況をよく見た上で、メロディーとこまめに実施の可否を相談・検討
- ・イベント活動：メロディーと話し合い、本サークルとメロディー関係者以外の参加を禁止。オンライン配信などの対面以外の参加については認める。
- ・定例会議：毎月1回Zoomを利用してHarmonyとメロディーの連絡事項や今後の活動予定について議論

DELIVERABLE

成果物／制作物



クリスマスコンサート チラシ

<その他成果物>

「おとくら」作品展示会チラシ

定例会議議事録

08 未来看護塾



地域の人々の心も体も生き生き健康に！

地域に住むさまざまな人々の交流や病院でのリラクゼーション活動などの健康支援活動を通じて、心も身体も健康にその人らしく生きることを志向するとともに、未来の看護のあり方を考えていきます。

TEAM DATA

チーム名：未来看護塾
代表者：小澤諒子（人間看護学部）
メンバー数：238名
指導教員：伊丹君和、米田照美、関恵子、千田美紀子（人間看護学部）
活動場所：学内、彦根市
関係団体：彦根市立病院、NPO 法人ぼぼハウス 他
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

(1) 学内イベント



ハンドケアのための水分量チェック (10/18)

(2) ビバシティ彦根「応援！生き生き健康生活」（生き生き健康支援活動）

★見出し写真：ビバシティで体操 (12/04)



ちびっこ広場での様子 (12/04)

(3) 友仁山崎病院 ボランティア

(4) 特定非営利法人 NPO ボボハウス / はばたき ボランティア

(5) 城南小学校（保健室）ボランティア

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度、例年と大きく異なる点は主体となる2回生は感染症が流行していない大学生生活を送ったことがないこと。つまり、例年の活動を知らない、活動をしたことがない人が大半だということである。不安を抱えながらも始まった活動だったが、先生や先輩、施設の方々など多くの人に協力いただき、感染拡大防止に配慮しながら活動を再開することができた。

12月には休止していたビバシティ彦根での「応援！生き生き健康生活」という健康イベントを実施することができた。参加した地域住民の方からは「勉強になった」「これから気をつけますね」といったありがたいお言葉をいただいた。感染症の影響で人と話す機会や関わる機会が減ってしまう今、学生との交流は地域の人にとって良い影響があったと考える。もちろん、学生にとっても、ボランティア活動がなかなかできず、活動のイメージがつかめないという学生が多くいたが、このイベントを通して活動への意欲向上が見られた。

今年度から新たな取組としてバルーンアート等のグループを作り、活動してきた。これは、今後の活動を見据えてグループごとに練習し活動機会を増やすことを主な目的としている。今後さらに、活動意欲のある学生が、主体的に活動できる環境を整えていく必要がある。昨年に引き続き、今年度の活動も新型コロナウイルスの状況に左右され、思うような活動ができないことがあった。しかし、このような状況だからこそできることは何かを試行錯誤し、活動を継続することが重要だと実感した1年間であった。活動することでしか得られない貴重な経験や新たな出会いがあった。これらの経験を生かして、来年度は今年度よりもさらに活動の場を広げ、地域の人々の健康をサポートしていきたい。

活動を通して学んだこと

ほぼハウスでのボランティア活動を通して、子どもたちに手厚いサポートをするというよりも、子どもたちの言動を尊重しながら必要時には手を差し伸べるといった関わり方を学びました。

小澤諒子（人間看護学科2回生）

実際に地域へ赴いて活動を行ってみると、地域の人の表情や思いを感じることができ、人と直接対面することの魅力を改めて認識しました。今年度も制限が多い一年でしたが、行動することはやはり大切だと学びました。

永谷悠（人間看護学科2回生）

実際に人と交流することでしか得られない経験があると感じました。できないことではなく、今だからこそできること、したいことに目を向けることが重要だと学びました。

坂本麻都衣（人間看護学科2回生）

地域からのコメント（抜粋）

ビバシティ彦根 平和堂企画マネージャー 杉江敏樹さん

ビバシティ彦根センタープラザにおいて「応援！生き生き健康生活」と題したイベントを、伊丹先生を始め約40名の塾生さんが参加されて開催されました。血圧・体脂肪の測定や、ちびっこ広場のお子様イベントなど、多岐にわたるメニューを楽しく実施され、ご来店のお客様に喜んでいただきました。今、平和堂は「地域社会の課題」の解決とグループの成長が両立することを目指し、当社の事業活動の中で地域の皆様にさらに貢献できることについて様々な取組を進めています。これは未来看護塾のみなさんの活動とも共通することが多く、子育てや高齢者のみなさんが身心共に健康であるために、取扱う商品が安全であることはもちろんのこと、心からお楽しみいただけるイベント等の実施にも注力していきます。そのひとつとして未来看護塾さんの活動はとてありがたいイベントとして感謝しております。

指導教員より（抜粋）

人間看護学部 伊丹君和

未来看護塾の活動目的は、「地域のさまざまな人々が心も体も生き生きと健康な生活が送れるよう支援する」ということであり、これはSDGsの目標の1つである「すべての人に健康と福祉を」にも貢献しています。コロナ禍であっても自分たちができることは何か、どうしたらできるかを模索し、できることを工夫してやってみること、そのプロセスが大切だと思っています。まずは、大学内の教職員や学生を対象とした健康支援活動から再開し、12月には2年間休止していたビバシティ彦根での「応援！生き生き健康生活」という地域住民の方を対象とした健康イベントを実施することができました。コロナ禍で通常より煩雑な中、本当に頑張っていると思います！小規模でも地域での活動を継続していくことに意義があります。次々と活動のバトンを繋げていけるよう、私たち顧問（教員）も陰ながら支援していきたいと思っています。

このような「近江楽座」の活動は、地域課題の解決とともに、学生の自ら学ぶ力、それぞれの専門分野への興味・関心や知識・技術を高めるものであり、教育的な効果も大きいと考えています。各プロジェクトにおける学生間の縦と横のつながりの関係性はもちろん、地域住民との関係性など、自ずと社会性やコミュニケーション力の向上にもつながります。悩み試行錯誤を重ねながら企画実施する中で、実行力と豊かな感性をも育んでいます。

新型コロナウイルス関連の対策 ・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・イベント時における対面や接触による感染リスクの低減、安心して参加していただける工夫（人の流れの一方通行化、パーテーションの設置、座席間隔を十分に空ける、滞在時間が短くなるようにする等）

DELIVERABLE

成果物／制作物



応援！生き生き健康生活チラシ

09 とよさらだプロジェクト



ひとりいこうぜ！（野菜）

豊郷町の耕作放棄地をお借りし、地域の方にアドバイスをいただきながら野菜づくりを行っています。栽培した野菜で直販所、大学生協への販売、イベント出店を行い、地産地消の促進をめざしています。

TEAM DATA

チーム名：とよさらだプロジェクト
代表者：桶師慎平（環境科学部）
メンバー数：21名
指導教員：畑直樹（環境科学部）
活動場所：滋賀県犬上郡豊郷町
関係団体：豊郷町役場
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

(1) 豊郷町での野菜作り



ナスの定植（05/03）

★見出し写真：タマネギの収穫（06/06）

(2) 農機具、倉庫の修理



ハウス内の掃除（05/07）

(3) 近江楽座中間報告会

(4) 湖風夏祭への出店

1年のまとめ・考察（成果と課題）

今年度は昨年度とは違い、おおよそ一年通して活動を複数人で行うことができた。特に春から夏にかけては作業の参加人数が多く、活発に活動を行うことができた。またできた野菜をメンバーが持ち帰ることで、プロジェクトの目的の一つである地産地消に対し、少しではあるが貢献することができた。8月末から10月上旬については、新型コロナウイルスの影響により活動が制限され、例年通りの作物の栽培が難しくなり、雑草も生い茂り畑の状況が悪化した。また10月以降は上回生が忙しくなり、送迎の車を準備することが難しくなったことにより、作業に参加するメンバーがかなり少なくなってしまった。今後、自転車での畑の移動ルートの共有、自転車での参加を呼び掛けていく必要がある。

現在のメンバーのほとんどは、プロジェクトに参加するまで農業の経験が無かった学生である。そのため野菜栽培について分からないことが多く、地元の農家の方に助けてもらうことが多い。農家の方に教わったことをメンバー全体で共有し、野菜栽培について学ぶことが重要であり、野菜栽培に関する技術を向上させていく事が今後の課題である。

昨年度は新型コロナウイルスの影響で、大学祭や地域のお祭りが中止になったこともあり、活動が制限され、地域の方との交流の機会も例年に比べ減少してしまった。しかし今年度は湖風夏祭が開催されたことによりメンバー内の仲は深められた。新型コロナウイルスがどうなるか次第ではあるが、地域でのイベントなどに呼んでいただける機会があれば、積極的に参加し、地域の方々との交流を図りたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

実際に農作業に取り組んで、作業の苦勞について学ぶことが出来ました。いわゆる地味な作業が多いことを改めて実感しましたが、目に見えての成果が出るので達成感のある作業が多かったです。スーパーなどの店頭に並んでいる野菜が、どれだけ整った形で販売されているのかを実感したと同時に販売できない物の活用の重要性を知りました。

河原崎駿 (環境政策・計画学科1回生)

とよさただでは畑の耕し方から始まり種をまく時期や収穫の仕方など多くのことを学びました。また、自分の手で育てた野菜を食べることで、食の大切さや食材を無駄にしないという意識が生まれました。将来は自分で育てた野菜を使って生活したいと思いました。

小山花奏 (環境生態学科1回生)

地域で活動する楽しさです。声をかけてもらったり、野菜の育て方についてのアドバイスを頂いたりでき交流の大切さがわかりました。また、湖風祭では自分達で育てた野菜を使って商品を作り売ることができ楽しかったです。コロナウイルスの影響でとよさただで活動した時間はまだ短いため、これからはもっと地域で活動できるようになりたいです。

尾崎礼奈 (環境政策・計画学科2回生)

一番学びが多かったことは野菜を作る時の大変さでした。土の耕し方や水のやり方、肥料の必要性など、色々な点に注意を払わなければ、野菜は出来ないということでした。大変さを知った上で、地域の方達が育てている野菜を見せてもらおうと、より立派に育てているように見えるようになり、どれだけ農家の方が頑張られているのかという事に気がきました。またこれまでに一度も触れる機会がなかった農具の使い方を教わり、農具の利便さを改めて知る事が出来ました。

蓮田悠太 (環境政策・計画学科2回生)

地域からのコメント

豊郷町農家 市田豊さん

今年の前半は活動の参加人数が増えているようで良かったが、段々減ってきていて少し残念。大学生が農業に興味を持ってきていることはうれしい。若い世代に農業を広げるように頑張って欲しい。平日にも畑に来られるようになれば、活動の幅が広がるのではないかな。

指導教員より

環境科学部 畑直樹

今年度の栽培方法や収穫量を詳しく記録し、来年度以降の参考資料として活用できるようにしてください。毎年継続的に栽培する作物を選定して、栽培技術を向上させることで、収穫物の生産性がさらに高められるようにできるとよいと思います。ビニルハウスであれば、Webカメラを設置して遠隔でも監視できるようにするのもよいですね。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

・感染防止対策の徹底
(メンバー各自で検温、体調が少しでも優れない場合は活動に参加しない、マスク着用の徹底、ソーシャルディスタンスを保つての作業など)

DELIVERABLE

成果物／制作物



ナス



ニンジン

<その他成果物>

タマネギ、ニンニク、ミカン

10 沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト



人と自然と生き物を愛すプロジェクトです！

琵琶湖の湖畔に流れつく流木を収集し、収集した流木を用いて、地域の人の交流、遊び、学びの場として活用できる建築や空間をつくり、様々な地域活性イベントを行いながら、多世代にわたる地域の人達と交流を進めます。

TEAM DATA

チーム名：沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト

代表者：黒木一輝（環境科学研究所）

メンバー数：12名

指導教員：芦澤竜一（環境科学部）

活動場所：沖島（近江八幡市沖島町）

関係団体：沖島ファンクラブ「もんで」

近江楽座活動年度： [2004](#) [2005](#) [2006](#) [2007](#) [2008](#) [2009](#) [2010](#) [2011](#)
[2012](#) [2013](#) [2014](#) [2015](#) [2016](#) [2017](#) [2018](#) [2019](#)
[2020](#)

PROJECT

実施事業

(1) 屋根計画・施工



茅葺の指導 (10/31)

★見出し写真：屋根の完成 (12/11)

(2) 文化祭への参加



沖島文化祭 (11/03)

(3) イルミネーションの実施

(4) インテリア制作

(5) メンテナンス

(6) 第2回 AND 賞プレゼン

1年のまとめ・考察（成果と課題）

1年間の活動を通して、たくさんの沖島の人たちとのコミュニケーションをとることができた。今年度の活動当初は、RYUBOKU HUTの敷地内が雑草などで荒れていたため、島の人たちからもたくさんのご指摘を受ける形で活動をしていたが、活動を進めるにつれて長い間協力してくださっている協議会の方々はもちろん、島の自治会の方々とも詳しく話す機会ができた。その中で、「RYUBOKU HUTが島に何の為になるのか」「沖島は将来どういう方向へ向かっていくか」など、様々なお話を聞かせていただくことが多かった。

活動を続けながら、RYUBOKU HUTは島のために何かできないか。ということを考えるようになった。今年度の活動は、屋根をかけるだけで手いっぱいとなってしまったが、来年度以降、インテリアや行事企画など、島の思い出や風景となる建築としてRYUBOKU HUTを活用できないかなど、様々なことを考えている。また、今年度は屋根という物的な成果を残すことはできたが、調査や記録など行うことはできなかったため、今後の課題として捉えたいと思った。また、建築をつくるだけで終わってしまっは、近江楽座として活動させてもらっている意味がないと考える。これから先も継続的に沖島で活動し、RYUBOKU HUTを利用して沖島に何ができるのかを考えていきたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

このプロジェクトへの参加を通じて、作り手主体ではなく、まちのひとと共に作っていくという作り手と使い手が一体となった建築の重要性を再認識しました。また、材料の調達をはじめ、沖島の人の協力があってこそ継続することができている活動であるように感じているので、今後も周りの協力に感謝しながら活動を継続していきたいです。

小林優希 (環境建築デザイン学科3回生)

活動を通して沖島を好きになることができました。プロジェクト開始当初は島の方々ともなかなか会話することができず、難しい期間を過ごしていました。活動が進むにつれて、島の人達がいさつやいろんな意見をしてくださるようになり、実はとても暖かく迎え入れてくれていたんだなと気づきました。建築を通して地域コミュニティをつくるということ、実践をしていくことの難しさを改めて考えられる1年間となりました。

黒木一輝 (環境科学研究科環境計画学専攻1回生)

この活動を通して、私は建つまでのプロセスなどを経て実際に建築を作ることがいかに難しいか、地域に暮らす人々とのやりとりなど、学生でできる中で非常に貴重と思える体験をすることができました。今後もこの経験を踏まえて、より実施的、献身的に建築や取組を行なっていこうと思いました。

山田啓真 (環境科学研究科環境計画学専攻1回生)

地域に入り込んで活動する面白さと大学では学べない社会経験をすることが出来ました。僕たちが作った休憩所で、島のひととご飯を食べた時は最高でした。その体験を忘れず、社会でも活動していきます。

幸永幹真 (環境科学研究科環境計画学専攻2回生)

地域からのコメント

沖島町離島振興推進協議会 本多有美子さん

流木ハットは沖島の素材だけを使った他には無い特別な場所です。島内には気軽に休憩出来るところがなく、休憩所が欲しいとの島の声を受け、滋賀県立大学の先生方や多くの学生さんの力で出来あがりしました。制作期間中は多くの課題があり、決して簡単ではなかったと思います。この思いの詰まった流木ハットが人々で賑わい、憩いの場所として続いて行く事を願います。引き続き沖島での活動に期待しております。ありがとうございます！

指導教員より (抜粋)

環境科学部 芦澤竜一

流木ハットは、琵琶湖沖島の島民と観光客のために計画された休憩所で、2018年からプロジェクトがスタートし、2020年に一旦構造躯体が完成した。構造体は島に漂着した流木を沖島の漁師さんの技術である箱結びという縄技によって結束した他に類がないものである。島の素材のみで建築をつくることをスローガンに、これまでも色々と試行と失敗を繰り返してきた。今年度は、雨が凌げる屋根をかけることを第一の目標とし、他にも人々が過ごすためのインテリアを整備する予定であった。しかしコロナの影響下、学生達はなかなか思うようには進められなかったと感じる。そのような困難な状況にもめげずに、彼らは大学にて屋根のデザインスタディやモックアップなどを繰り返して行い、結果これまた類がない素晴らしい屋根が完成したのではなかろうか。島で採れた竹笹と近江八幡西の湖の葦を用いた草屋根である。現地やオンラインで何度もご指導いただいた美山茅葺の中野誠さんには感謝を申し上げたい。屋根、そして一部の家具の完成後島民の皆さんと流木ハットで鍋を囲む機会があった。この時初めてこの建築が島の一部となったことを私、学生達は感じたのである。ただ課題はまだ多い。来年度は、島民はじめ皆さんの声を多く聞く機会をつくりながら、更に学生達と流木ハットをアップデートできればと考えている。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・流行拡大時は活動の自粛及び軽減
(宿泊の禁止、少数シフト制での活動、学内(リモートワーク)でできる活動など)
- ・非常時においても、副代表(沖島移住)と連携をとりながら活動をを進める

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



葦と笹で葺いた屋根

11 Taga-Town-Project



多賀の魅力を発見！発信！

学生目線の発想で多賀町の魅力を発見し、町内外に発信する団体です。今年度は、多賀で活躍する人に焦点をあて、魅力を発信したり、散策マップの作成や企業とのコラボなど、様々な取組にチャレンジしています。

TEAM DATA

チーム名:	Taga-Town-Project
代表者:	宮野明日香（人間文化学部）
メンバー数:	5名
指導教員:	迫田正美（環境科学部）
活動場所:	滋賀県犬上郡多賀町
関係団体:	一般社団法人多賀観光協会
近江楽座活動年度:	2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020

PROJECT

実施事業

- (1) Web 広報誌「たがいと」発行
- (2) 絵馬通り散策マップ作成
★見出し写真：絵馬通りマップの取材（07/17）
- (3) 「学生と考えるウェブマガジン」の作成(株式会社中栄とのコラボ企画)



株式会社中栄に取材（10/22）

- (4) 新入生説明会の開催
- (5) 胡宮神社ライトアップイベント参加
- (6) ささゆり球根植え参加



球根植えの様子（02/28）

- (7) 県大ラジオ部取材対応

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

総合的にみて成果の多い年だった。第一に活動とそれに伴う成果物の増加である。今年度、多賀に訪れる機会は20回と昨年度の2倍以上となった。成果物も絵馬通り散策MAP、たがいと第五回分、中栄ウェブマガジン第二回分と成果物の量も種類も激増した。また、多賀を訪れて多賀町民（主に絵馬通りMAPのお店の方）と交流したことで、TTPの知名度が上がり、メンバーも多賀のことに一層詳しくなった。SNSの更新が増えたことも大きな成果である。第二に新入生2名の参加である。TTPはここ数年間メンバーの獲得が大きな課題だった。今年度は4月と10月に新入生向けのイベントを行い新入生獲得に努めた。

次に課題について、第一に新入生への引継ぎである。今年度は主に3回生3人で活動しており、後輩とともに活動する機会が少なかったため、引継ぎが現段階では不十分である。第二に読者の欲する情報の提供である。SNSやたがいと、中栄ウェブマガジンなどの更新頻度は高かったものの、それぞれの閲覧数はあまり伸びなかった。表示回数で言うと、2021年12月から2022年3月10日の集計でHPの表示回数は390回、たがいとは62回であり、SNSのフォロワー数では、2022年3月10日現在instagram373人、Facebook307人、Twitter178人とどまっている。今後はインプレッションを分析して、HPやSNSの読者がどんな情報を欲しているのかを明らかにすること、その情報をもとに発信内容の質を向上させることが必要である。第三にTTPの過去の活動のアーカイブである。TTPは今年度で18年目の活動だが、過去にどんな活動をしてきたのか、その成果や課題が共有されていない。このことで、18年間続いているという強みを生かせていない。次世代にも活用できるような過去の活動記録のアーカイブを作ることが必要である。

活動を通して学んだこと (抜粋)

分析と計画の重要性を学んだ。今年度は年間で20回以上多賀に訪れるなどTTPに費やす時間が前年度と比べると格段に増え、私たちに精一杯活動した。しかし、SNSの閲覧数など数字的にはTTPへの注目度は低いままで、分析不足を感じた。また、絵馬通りMAPの完成が遅れるなど、計画の甘さもみられた。しかし、これは活動量が増えた為に新たに発生した問題で、TTPの活動が次のステップに上がった証拠だと思う。次の世代がこの課題に前向きに取り組んでくれれば嬉しい。 **小林すみれ(地域文化学科3回生)**

限られた人数と時間、新型コロナウイルスの感染拡大という先行き不明な状況の中で、自分たちでできることを探し、それに最大限取り組んだ一年だった。とくに絵馬通りのマップ作成に際して、町内にあるほとんどすべての飲食店とお土産物店に足を運んだことは貴重な機会だった。またウェブ広報紙「たがいと」は、計6人に取材し記事を掲載することができた。長く継続させることを目標に、リレー形式をとったことも功を奏したと考える。 **久木絢加(国際コミュニケーション学科3回生)**

多賀町の魅力を知ることができた。絵馬通り散策マップ作成のための飲食店や土産物店の取材、ささゆり球根植え参加などの活動を行った。その中で地域の方との交流ではお店のこだわりや地域の現状など様々なお話を聞く事ができ良い経験となった。 **石川智那(生物資源管理学科1回生)**

コロナの影響で部活やサークルでの活動が制限されるなか、取材や体験活動を行えて良い経験となった。社会で働かれている人から話を聞くことで努力や成功の方法を学んだ。多賀の人から実際に、やり方やコツを教えてもらうのはコロナ禍で人との交流が少なくなっていた私にとって新鮮であった。 **堤清之介(生物資源管理学科1回生)**

今年度は大きなプロジェクトが多く、非常に充実した年になったと感じる。中でも人にお話を聞く機会が多くあり、その分今まで見えなかった多賀町の魅力が見えてきたように思う。自分たちが見たこと、感じたことだけでなく、「人の想い」を知ることでも地域を良くする上で必要なだと学ぶことができた。 **宮野明日香(人間関係学科3回生)**

地域からのコメント (抜粋)

一般社団法人多賀観光協会 宮野由紀絵さん

多賀大社には、年間170万人の参拝者が訪れますが、観光協会にも、たくさんの方の参拝者、観光客の方が訪れます。「食事できる場所ありますか?」「お土産を買う場所ありますか?」という問い合わせも多くあります。しかし散策マップしかなく、説明するのに不慣れを感じていました。そこで、散策マップとは別に食事とお土産だけに特化したマップを作ることになりました。滋賀県立大学のTTPのみなさんは、多賀町の情報発信をされていたので、TTPの方と一緒に制作に取り掛からせていただきました。まずはマップに搭載するお店をまとめ、各店舗に協力と情報記入のお願い、32店舗の協力店舗に行き取材、確認など。途中、新型コロナウイルスによる影響で思うように取材できないこともありました。長期間にわたって多賀の中を歩き、お店の方々と交流を持っていただくことができました。多賀町のイメージ、田舎＝和風をベースに「和モダン」に仕上げさせていただき、多賀のミニ歴史情報記載、TTPの皆さんの力のおかげで、とても良いマップが完成しました。長期にわたり、マップ制作に携わっていただきありがとうございました。

指導教員より

環境科学部 迫田正美

昨年度から引き続き新型コロナウイルス感染対策のために大きな制約がある中での活動となった。多くのイベントが中止となる中で、自分達にできることを見つけながら活動を継続できたことはみんなの工夫と努力によってできた成果だと思う。一方でこのような状況が2年間続いたことはTTPの活動の魅力や意義を後輩に繋いでいく、という点ではなかなか困難な課題となっている。TTPが得意とする情報発信の方法や内容を工夫し、オンラインが日常の中に浸透したことをうまく利用し、コロナの時代の新たな活動に繋げていくことが課題ではないかと考える。今年度の経験を生かして新たな活動の発展を期待している。

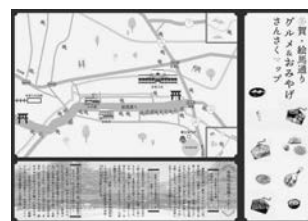
新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・オンラインミーティング
- ・SNSによる情報発信
- ・観光MAPにテイクアウトができる店舗を表示

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



絵馬通りマップ



宣伝用チラシ

<その他成果物>
活動説明会チラシ
多賀町民向けチラシ

12 廃棄物バスターズ



琵琶湖を救え、廃プラを雨水タンクに

地域での清掃活動やリサイクルプランターを活用した hana-wa 活動など、環境と福祉を繋ぐ活動を行っています。また数年前から、一般家庭から排出される廃棄プラスチックを原料に、雨水タンクを製造する技術の研究を始め、マイクロプラスチックなど様々な環境問題に取り組んでいます。

TEAM DATA

チーム名：廃棄物バスターズ
代表者：岩井柊太（工学研究科）
メンバー数：17名
指導教員：徳満勝久、竹下宏樹（工学部）
活動場所：彦根市、滋賀県内
関係団体：社会福祉法人いしづみの家 他
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

- (1) 雨水タンクの作製
- (2) hana-wa 活動
- (3) 彦根市清掃活動
★見出し写真：彦根市清掃活動の様子（03/13）
- (4) びわ湖放送さんのごみ調査、広報活動
- (5) 滋賀グリーン活動ネットワークでの活動
- (6) 「マイクロプラスチック・ストーリー」上映会



上映会の様子（10/29）

- (7) ご当地キャラ博
- (8) 滋賀竜王アウトレットモールでの広報活動
- (9) 斗々屋への取材

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

雨水タンクについては、成形不良改善のため成形条件の変更を行ったが、試作が最終報告までに間に合わなかった。課題の解決に向け、地道な検討と企業との連携を進めていきたい。hana-wa 活動では、プランターメンテナンスとペットボトルキャップの回収を継続して行うことができた。彦根市の清掃活動、花壇の植え替え作業は、コロナの影響により例年よりも参加回数は少なかったが、継続して取り組み、地域に貢献できた。びわ湖放送さんのごみ調査・広報活動は、ごみ調査カードを導入し、ごみを分別しながら回収することで、どんな形状や種類のごみが落ちているかを実感することができた。マイクロプラスチックになり得るごみが実際に多く落ちていることも確認できた。

また、滋賀グリーン活動ネットワークの幹事として活動するとともにセミナーの企画、運営等を行った。ご当地キャラ博はコロナの影響によりオンラインでプラスチック問題の発信を行った。この他、マイクロプラスチック・ストーリー上映会に参加し、アクションすることの大切さを学び、京都市にある量り売りをしている斗々屋さんを取材し、量り売りの難しさや環境への配慮を学んだ。さらに、はじめて行った滋賀竜王アウトレットモールでの PR 活動では、ディスプレイやアンケートの準備不足で課題が浮き彫りになったが、より多くの人に私たちの活動を知っていただけるよい機会だと思うので、今後も定期的に行えたらよいと考えている。

活動を通して学んだこと (抜粋)

成長・失敗を重ねた一年間でした。代表として、いろいろなものを背負い込んでキャパオーバーすることが多く、もっと周りに目を向けなければいけないと痛感しました。また、すべてが当団体のみで成しえないものばかりでした。当団体に寄せられる期待は非常に大きく、誇らしいと同時に、現状維持という安定思考ではなく、責任感を持って前のめりに取り組む必要があると感じました。

岩井柊太 (工学研究科材料科学専攻1回生)

今年度、コロナの影響もあり、大人数のイベントでの活動が出来ませんでした。そのため、地域の清掃活動やゴミ調査、また広報活動などに注力し活動しました。その中の地域での活動において、身近な場所でゴミのポイ捨てが多く行われている現状を目の当たりにしました。この現状を改善すべく地域での活動にもこれから注力していくべきであると感じています。

寺倉啓悟 (工学研究科材料科学専攻1回生)

人とのつながりの重要性を学びました。積極的な活動はできませんでしたが、その中でもこれまでのつながりだけでなく、新しいつながりの方々とも一緒に活動ができました。どの活動も我々だけでは成しえないものでした。また、個人的には、広報担当として新たにホームページを立ち上げました。アクセス数の増加が、日々の活動のモチベーションになりました。

中尾和樹 (工学研究科材料科学専攻1回生)

コロナ禍の影響は受けていましたが、びわ湖放送で「琵琶湖と海はつながっている! うみゴミ対策プロジェクト」の調査の様子が放送されたり、ゆるキャラ博のオンライン放送で活動を紹介していただいたり、様々な形で当団体の活動を知っていただけたことを嬉しく思います。今後もより一層、対外活動を通じて、PR活動に取り組みたいと考えています。

羽田野歩美 (工学研究科材料科学専攻1回生)

地域からのコメント (抜粋)

社会福祉法人いしづみ会 八田 尚樹さん

廃棄物バスターズとPCR(ペットボトルキャップリサイクル)作業所連絡会との協働活動も早いもので10年以上が経過しました。キャップ回収については県内の企業・小中高校・各自治体の協力を得る事が今年もでき、作業所ごとに回収させてもらっております。プランターリース活動については名神高速道路の菩提寺PA・大津SAの定期メンテナンスをバスターズのメンバーと共に実施、仲良くコミュニケーションをとってもらいながら花の手入れの作業に関わってもらっています。各作業所では社会性を養うという課題を上げていますので、公共の場所に出て他の作業所のメンバーやバスターズのメンバーと会話・挨拶をすることはとても重要な部分です。利用者の方々も楽しみにしているので、とても助かっています。

指導教員より (抜粋)

工学部 徳満勝久

今年度の活動は実に多岐に渡り、その活動を地域に広げる・さらには定着させることができた年であったように思う。障がい者の方々の雇用を創出するhana-wa活動を継続して実施し、地域貢献活動については新型コロナ感染防止対策のために多数の活動が中止となったが、びわ湖放送様と実施した「南三ツ矢公園清掃活動」や滋賀グリーン活動ネットワークでの「マイクロプラスチック・ストーリー」上映会およびディスカッションパネリスト等々、様々な活動が実施・経験できた。ご協力頂いた各種団体、学校様のご協力の賜だと思います。

また、環境科学部の丸尾教授のご協力も頂きを実習船「はっさか」で琵琶湖のマイクロプラスチックを回収する計画も策定したがコロナ禍で中止せざるを得ない状況となった。今後は、ポストコロナの状況で如何に“地域での地道な活動”を継続して実施すると同時に、「地域分散型治水ダム」と銘打った“雨水タンク”の製造技術を確立し、それを実際に世に問うていく取組が実を結ぶことを期待しています。

新型コロナウイルス関連の対策 ・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・外部団体との打合せや会議のオンライン実施

DELIVERABLE 成果物 / 制作物



雨水タンク

13 犬上川竹林整備プロジェクト



理想の竹林モデルの発信！！

大学前の一級河川犬上川河辺林を中心とした放置竹林の整備を行うとともに、整備で得た竹を製作活動に利用し、現代社会で利用されなくなりつつある竹の価値を上げるために発信しています。

TEAM DATA

チーム名：竹林 GAKU
代表者：田村彩華（環境科学部）
メンバー数：14名
指導教員：野間直彦（環境科学部）
活動場所：学内、彦根市
関係団体：犬上川開出今地区竹林愛護会、彦根市、滋賀県
近江築座活動年度：[2004](#) [2005](#) [2006](#) [2007](#) [2008](#) [2009](#) [2010](#) [2011](#)
[2012](#) [2013](#) [2014](#) [2015](#) [2016](#) [2017](#) [2018](#) [2019](#)
[2020](#)

PROJECT

実施事業

(1) 竹林整備



竹林整備 (10/16)

(2) ヨシフェス



ヨシフェスの様子 (11/27)

(3) たがの たべるの よびし市

★見出し写真：竹あかりの展示 (11/21)

(4) 大学での竹あかり展示

(5) エコキャンパスセンターの清掃

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

新設団体ということもあり、活動手順や内容について悩むことが多かったが、参考にしたエコキャンパスプロジェクトの資料やOB・OGの方々や大学の先生方の紹介により、活動の幅を大きく広げることができた。関係団体の犬上川開出今地区竹林愛護会の方々を中心に滋賀県で竹林整備を行っている方々や竹の活用に興味を持つ方々と多く知り合うことができた。部員も環境科学部以外に工学部の学生も多く、今後も多くの学部学科の学生を集めていきたい。

まず、竹林整備活動では、彦根市建設管理課に竹林整備の方法や支援をしていただいた。彦根市生活環境課と清掃センターから竹林内に落ちているゴミを回収するボランティア袋をいただき、無料で回収していただいた。今年度は道路と河川をつなぐ大きな道を竹林内に作り、道路側の堤防の竹を整備したことにより、整備後はポイ捨てゴミが減った。課題は竹を切った後に枝打ちをする必要があり、作業効率が悪くなってしまったため、来年度は日程を決めて竹の粉碎器を借りるべきである。次に、「ヨシフェス」や「たがの たべるの よびし市」などで、活動で作った竹あかりをはじめ、活動について多くの方に知っていただく機会を得ることができた。課題は、新型コロナウイルスの影響でワークショップなどを今後実施しにくい可能性があるため、竹あかりをはじめとする竹の製作物による展示や販売を積極的に行っていくべきである。また、拠点にしているエコキャンパスセンターの清掃を行なったが、周辺にゴミなどが散乱している場所があるため、竹林に入ることでできない夏季に拠点整備を行っていく。

活動を通して学んだこと (抜粋)

「継続性」について学ぶことが多くあり、深く考えさせられたと感じている。それは、続けなければ外部からの信用は得づらく、かつ竹林の維持・管理の効果が得づらいということを実感した、ということでもある。得られた学びを活かし、これからの活動をよりよいものとする。

大原千躍 (電子システム工学科1回生)

社会問題や地域に根ざした活動を継続するためには、活動を周知のものにするべきである。そのために、本活動では多くの人と関わることの大切さについて学んだ。展示やイベントに参加できたのは、大学の先輩や竹林整備に取り組む方のお陰であるため、これからも積極的に多くの人と関わっていきたい。

田村彩華 (環境生態学科2回生)

社会問題と普段の生活との関係を学んだ。以前は社会問題と聞くと敷居が高く、自身とは離れた存在だと感じていた。しかし、本活動を通じて社会の問題とは至る所にあり、普段の生活にも関わっていることが分かった。今後は本活動に関わることに加え、他の問題にも目を向けていきたい。

橋本拓也 (電子システム工学科1回生)

地域の方と交流する大切さ学んだ。活動が始まった当初は竹林の伐採など分からないことだらけだったが、地域で森林や竹林を管理されている方々からたくさんの事を教わり、実践してきた。地域の方と交流があったからこそ無事に初年度を終えられたと実感している。

松本優 (環境生態学科2回生)

地域からのコメント (抜粋)

まるやまの自然と文化を守る会 宮尾陽介さん

私たちは、近江八幡市円山町においてヨシ原の保全や放置竹林の整備を行っており、活動の中で収穫したヨシや伐採した竹の活用方法を模索してきました。そうした中、滋賀県立大学の平山奈央子先生との縁がきっかけで竹林 GAKU に所属されている学生と出会い、私たちが抱えている悩みを一緒に考えてくれるようになりました。ヨシも竹も収穫したものを単に廃棄するのではなく活用することで、整備自体も継続していけるような取組として、竹林 GAKU、あかりんちゅ、そして私たちの共催という形で、『ヨシフェス』を開催することとなりました。ヨシフェスでは、ヨシや竹で作ったランプシェードをキャンドルで灯して生まれる“煌めき”と、ヨシと竹で作られた琵琶湖よし笛が奏でる“音色”で、多くのお客様を癒すことができたと感じています。竹林 GAKU の方々には、企画の発案に始まり、材料となる竹の採取、竹灯籠の加工、会場の設営など終始ご尽力いただき、私たちの活動の可能性が広がったことは言うまでもありません。伐採した竹を活用した町おこしや商品販売などを手がけることで、竹林整備を持続性のあるものにしていくことを目指しており、今後も竹林 GAKU と一緒に活動を続けていければと考えています。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・共有の道具は、使用前後に消毒する。
- ・活動の前後で、参加メンバーの健康チェックを行う。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



竹灯籠、ランプシェード

14 たけともミライ



竹の会所と共に歩む！

2011年9月、宮城県気仙沼市に復興の拠点となる「竹の会所」を建設しました。竹の会所を拠点として、建物の整備、補修、イベント、まちあるきなどを実施し、地域の方に支えられて活動を行ってきました。活動の軌跡をまとめ、たくさんの方に知ってもらえるよう発信します。

TEAM DATA

チーム名：たけともミライ
代表者：佐藤允哉（環境科学研究科）、里本麗（環境科学部）
メンバー数：11名
指導教員：陶器浩一、山崎泰寛（環境科学部）
活動場所：宮城県気仙沼市
関係団体：株式会社 高橋工業
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

(1) 学外展示会

★見出し写真：滋賀県立美術館での展示会（03/18）



滋賀県立美術館での展示会（03/18）

(2) 学内展示会



滋賀県立大学での展示会（11/08）

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年は、たけともミライとしての締め括りの年となった。昨年は、ブックレット制作を行い、竹の会所にまつわるいろいろな記録を整理し、これまでの「たけとも」「たけともミライ」が歩んできた歴史をしみじみと感じた。この特別な活動をより多くの人々に伝えたいと感じたところから、展示会の計画が始まった。

まずは身近な人、滋賀県立大学にいる人へ向けて展示を行った。この学内展示会では、ブックレットの構成を引き継ぎ、「もの・こと・ひと」にテーマ分けし、写真やブックレット、年表、軸組模型を展示した。学内の誰もが使用するカフェテリアに展示できたことは、多くの人の目に触れるという点で一定の成果が得られたと感じる。

学外展示会では、山崎泰寛研究室+陶器浩一研究室を主催に、たけともミライは協力、という立場で関わった。とはいえ、主催と協力の区別は特になく、関係者全員が共に考え、計画できたと感じた。山崎研究室の学生は、見る側としての意見を持っていて、陶器研究室、たけともミライとしては、写真が示すものや図面が示すものを、当時のストーリーと共に詳しく語るできるので、展示内容に奥行きを持たせることができた。この2つの立場の関係者が互いの視点から意見を出しあい、展示計画を進められたことが大きな成果だと感じる。当然、展示物の密度も物量も、学内展示会を上回るものとなった。特に、観覧者の声が聞けたことが良かった。展示会期間中、週末は監視員として学生が1名、交代で在廊した。印象的な質問は、この活動を今後どのようにつなげていくのか、ということである。ものとしての竹の会所が無くなり、今、たけともミライとしての活動を終えた私たちは、活動を経て得た様々な経験や想像力を今後の自身の活動に大いに役立てていきたいと思う。

活動を通して学んだこと

展示の手伝いをさせて頂きました。名前には聞いていた「石丸結び」を学びながら、実際に竹フレーム作りに参加させて頂きました。初めて触る竹に戸惑うことも沢山ありましたが、立ち上がった時は、その大きさに圧倒されました。私には、竹フレームを展示として見る機会しかありませんでしたが、この竹フレームが人々を包み込む空間になっている様子を見てみたかったです。

今西希月（環境建築デザイン学科3回生）

「石丸結び」で固定された竹の接合部の安定感に驚きました。フレーム作成は晴れている日に作業した私たちでも大変だったため、台風で悪天候となった竹の会所の建設はさらに困難な現場だったのだらうと思いました。この竹フレームだけでなく写真などの展示物があり、多くの人との関わりで実現した竹の会所の雰囲気を感じられる展示になりました。

米澤脩助（環境建築デザイン学科3回生）

地域からのコメント（抜粋）

（株）高橋工業 代表取締役 高橋和志さん

10年以上にわたり活動を行ってくれた「たけとも」「たけともミライ」の活動について、地域として改めて感謝申し上げます。一昨年まで毎年続けて学生たちが地域に来てくれていたこと、活動を振り返って学生たちで考え発信していったこと、これらは誰もができることではないと思います。活動の区切りの年に、再びコロナに見舞われ、地域に来てもらうことができず、学生たちの顔を見ることができなかったことはとても残念でなりません。それでも、いつかまた学生たちと地域で交流できる日を期待しています。学生たちが活動を通して、感じ取ってくれたことをできる範囲で一つずつ行動に移していくことが、これからの地域と学生の未来をつくる第一歩になると期待しています。

指導教員より（抜粋）

環境科学部 陶器浩一

今年度も昨年度同様にコロナの影響を大きく受けた。当初は、現地において竹の会所解体後の片付け・整備と昨年度制作したブックレットを携えて現地の方々に今までのお礼を直接伝え、活動を締めくくる1年となるはずだった。それでも、学生たち自身で、ひとつの「たけともミライ」という活動を振り返り、活動を伝えていくということを、学内展示会を通じて行ってくれた。さらにありがたいことに、学外展示会を滋賀県立美術館で行えることとなり、学内展示会ではできなかったこと、より伝えるためにはと学生たち自身で話し合い、準備を進めてくれた。地域の方々やOBOGと十分な意思疎通が図れないなど多くの制約がある中で、構成や内容などを学生間で何度も協議して練り上げてくれて、「たけとも」という活動の理念と内容が伝わってくる良い展覧会になっている。

今年度を一応の区切りの年として、活動を終えたわけだが、この活動を通して学んだことをこれから学生たち自身で発揮していけるよう願っている。

新型コロナウイルス関連の対策 ・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・ミーティング室の配置変更
- ・リモートワークへの切り替え（まん延防止等重点措置発令中）

DELIVERABLE

成果物／制作物



「竹の会所のものがたり展」ポスター

15 座・沖島



沖島でまなぶ・まじわる・ささえる

日本で唯一、湖に人が暮らす島、沖島。島民は漁業を生業に琵琶湖と共に暮らしてきましたが、過疎化などにより、暮らしの継承が危ぶまれます。このような状況に「学生も何かできるのでは?」と、「まなぶ」「まじわる」「ささえる」の3つを目標に島の振興のため活動しています。

TEAM DATA

チーム名：座・沖島
代表者：宮崎啓太（環境科学部）
メンバー数：4名
指導教員：上田洋平（地域共生センター）
活動場所：学内、沖島（近江八幡市沖島町）
関係団体：沖島町離島振興推進協議会、沖島自治会
近江菜座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

(1) 畑作業



水路づくり (02/25)



ごみ拾い (02/25)

(2) 試作会

(3) 地域の方と関わり合い

★見出し写真：沖島で出会った人たちと一緒に登った山の頂上からの景色 (03/06)

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

2016年から始まった座・沖島は地域の方と連携して活動を行うことが多かったが、コロナの影響で沖島の人とお話ができるのは決まった人だけ、沖島離島振興会の方だけでした。毎年、沖島で開催される行事にお手伝いとして参加させてもらっており、その繋がりでも沖島に住んでいる方々と接する機会が多くありました。左義長祭りや桜祭り、春の大祭、遠泳大会、小学校の運動会、湖魚祭りなどたくさんの行事に参加させてもらっていました。春の大祭ではお神輿を担ぐのをさせてもらい、地域のおじさんやおにいさんの方々に「しっかりせい!」「がんばれ!」など言われていたことを鮮明に覚えています。しかし、感染予防の観点からお祭りや行事ごとが中止され、今年度の活動は畑作業が中心となりました。

畑作業はふるさと支え合いプロジェクトの一環で、沖島で使われなくなった土地、耕作放棄地を活用して、作物を育てようとしたものです。植えた作物は青パパイヤやレモンなどで、約月一回ほど沖島に赴き、雑草を抜いたり、肥料を与えたり、水を与えたりしました。前期期間では青パパイヤが大きく育ち、後期間の初めのころに実がなり収穫までに至りました。また、後期間の最後の方で水路づくりに励み、畑で問題となっていたぬかるみを解消できました。もう一つの活動として獲れた青パパイヤの実を使って試作会を行いました。耕作放棄地を使うことで獣害対策になり、その土地で獲れた実を使って商品化をし、沖島を広報できるような活動をしました。試作会はこれからも継続していきたいと考えています。

今年度は活動している人が少なかったことが課題だったので、今後は活動する人が増えるように広報することや畑作業の継続、また沖島で行事が行えるようになるのであればその行事に積極的に参加していきたいと考えています。

活動を通して学んだこと

コロナ禍で活動が制限されていたため、主に畑作業しかできませんでしたが、畑作業を通して地域の方と関わり合うことができて良かったです。今年度は畑で育てた青パパイヤを使って試作会という新しい取組もできたので、これからも新しいことに挑戦していけたらいいなと思いました。

古田裕惟（生物資源管理学科2回生）

試作会に参加させてもらいました。そこで、企画の難しさを学びました。また今後も、祭りや行事ごとに積極的に参加していき、地域の人と関わり合いを通じて多くのことを学びたいと思います。

佐野文亮（環境生態学科3回生）

今年度から座・沖島の代表を引き継いで、他のメンバーとのやり取りや地域の方とのコミュニケーション、いろいろなことで学ぶことが多くなりました。これからも座・沖島が続くように頑張っていきたいと思います。

宮崎啓太（環境生態学科3回生）

地域からのコメント

沖島町離島振興推進協議会 富田雅美さん

昨年度から耕作放棄地を再利用するために整備をしていただきました。荒れ果てた地を整備するのは並大抵なことではないですが天候に左右されながら少人数でコツコツと頑張り、パパイヤの実をたくさん収穫できたことを有難く思います。次年度はパパイヤの商品開発などにも期待しています。また、従来参加されていた沖島の祭りや行事などがコロナ禍で中止になっていますが、次年度復活できた際は是非参加していただき、沖島を盛り上げてもらいたいです！

指導教員より（抜粋） 地域共生センター 上田洋平

長年放置されていた水田跡を島の方々とともに開墾して植えた青パパイヤが見事に実った。日々その生育を気にかけてながらも一つのもの育てたり作ったりするのは良いことである。ただ、パパイヤについては収穫後の活用策をもう少し周到に練っておくこともできたかと思うので、今後に期待する。国等の補助を受けて進められている離島振興事業の第1期・10年の計画期間があと1年で終わるのに合わせて、第2期計画の策定作業が進められている。この作業の一端に関わっているが、次期計画の中には座・沖島はじめ学生のみなさんの存在や活動もなんらかの形で位置づけていただけるようになればと思う。住民の方の多くは、琵琶湖をはじめとする自然のめぐみがあり、気心の知れた住民同士で、また、誰に命じられることもない漁師の仕事によって生きてきた沖島のこれまでそして現在の暮らしには「不満」はないという。しかしこの先を考えると大きな「不安」があるという。この「不安」をどうやって「安心」に変えることができるか。つぎの10年について、ともに考えよう。

新型コロナウイルス関連の対策 ・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・調理を行う際も手洗い、消毒、ビニール手袋を活用して感染予防を行う。
- ・一部屋に大人数にならないように分散させる。

DELIVERABLE 成果物／制作物



青パパイヤ



青パパイヤを使ったカレーと福神漬け

<その他成果物>

畑の水路

16 おとくらプロジェクト



高宮に「新しい風」をおこす！！

彦根市高宮町で、築200年の古民家を学生が改修してできたコミュニティスペース「ギャラリー喫茶おとくら」の運営を軸とし、地域活動への参加、イベントなどを行い、地域をより元気にすることを目的に活動しています。

TEAM DATA

チーム名：おとくらプロジェクト
代表者：石田一成（環境科学部）、坂袖月（人間文化学部）
メンバー数：49名
指導教員：迫田正美（環境科学部）
活動場所：彦根市（高宮町）
関係団体：高宮連合自治会
近江楽座活動年度：[2004](#) [2005](#) [2006](#) [2007](#) [2008](#) [2009](#) [2010](#) [2011](#)
[2012](#) [2013](#) [2014](#) [2015](#) [2016](#) [2017](#) [2018](#) [2019](#)
[2020](#)

PROJECT

実施事業

(1) 喫茶活動



メニュー講習会 (08/08)

★見出し写真：引継ぎ会 (11/25)

(2) イベント活動

(3) ギャラリー運営



ギャラリー輪々 (06/20)

(4) 広報活動

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

新型コロナウイルス蔓延の影響により大きく制限された中での活動となったが、昨年度に引き続き自分たちにできることを模索し、最大限工夫して活動することができたと考えている。まず成果について、一つ目は夏湖風祭に初めて出店したことである。現在、喫茶営業を休止していることもあり、2回生以下のメンバーに営業経験がないという課題を抱えていたため、貴重な経験をすることができた。二つ目は高宮歴史研究部会の活動に参加することができたことである。喫茶営業の休止や各種イベントの中止によって、高宮の地域の方々に関わる機会は激減してしまった。しかし、地域団体の活動に参加するという形で新たに地域とのかわり方を構築することができたという点で大きな成果である。現時点では活動に参加するおとくらのメンバーも少ないため、今後さらに力を注ぎ、積極的に活動していきたい。次に課題であるが、一つ目はメンバーの経験不足である。現在、喫茶営業の再開に向けて申請を進めているが、喫茶営業を2年間休止した結果、営業経験のあるメンバーがいなかったことは大きな課題である。加えて、活動に参加する頻度にも差があり、結果として調理や接客などの技能の習熟度にも偏りが生まれてしまっている。来年度中の喫茶営業再開を目指しているため、メニュー講習会や接客練習会の開催、各種営業マニュアルの作成など、速やかに解決する必要がある。二つ目は所属メンバーの不足である。3回生が引退した現在、プロジェクトには31名の学生が所属しているが、その内訳は2回生25名、1回生6名となっている。すなわち、来年度、現2回生が引退した後の主要メンバーが6名のみということであり、これは活動存続が危ぶまれる人数であるといえる。したがって、新規メンバーの勧誘が非常に重要になってくると考えられ、新入生歓迎やプロジェクトPRなど、広報活動により一層注力する必要がある。

活動を通して学んだこと

活動では多くの地元の方々とお話をすることができた。私は自身の地元の活動にはほとんど参加しておらず、家族や教師以外の大人と話す機会がない。この活動に関わって、高宮町に住む方々と交流することが多くあり、日常ではできない貴重な経験ができた。

山本真菜（生活栄養学科1回生）

ギャラリーでの展示や経営にあたって、これまで繋がっていたひとから紹介して頂き、また新しい繋がりを得る、という事が多々ありました。そのような繋がりがないと私たちの活動は成り立っていません。このような経験から、人とひととの繋がりの大切さをひしひしと感じ、学びました。

倉重優香（人間関係学科2回生）

諦めないことの大切さです。今年度の活動は新型コロナウイルスにより大きく制限されました。しかしそんな中でも諦めず、皆で出来ることを考え、挑戦出来ました。活動が出来ず横の繋がりを失うサークルが多い中、これにより私たちの代は横の繋がりがとても強固になりました。

藤野雅也（生物資源管理学科2回生）

困難な状況下ではあったが、様々な学科から構成されるメンバー間での話し合いを通して、制限された中でどのような活動をするかを見つめなおし、新たな挑戦を行うことができた。また、満足に活動できない中でも見守ってくださる高宮の方々の温かさを強く感じた一年だった。

古田航己（環境建築デザイン学科2回生）

地域からのコメント（抜粋）

おとくら家主・おとくら応援隊長 加藤義朗さん

今年もコロナ禍なかなか大変で、かわいいそうな一年でした。でも夏湖風が開催され、準備から本番へ久しぶりに本来の活動が見られたようで、嬉しかったです。昨年の卒業式前に10周年記念誌が完成、送る言葉に添えられ、みんな喜んで大きく羽ばたいて行きました。いつもながら寂しい限りでした。知事さんからの記念誌へのお礼状は、励みとなり、また広報ひこね10月号に取り上げていただき、「継続は力なり」と、改めて実感しました。11月には、ばんちゃん・一成号からふるふる号へおとくら13代目が始動しました。念願の喫茶再開向けのいろいろ申請、まもなくオープンかと楽しみに待っております。お節介な家主の一言、君達の活動はSDGs実践の先駆者です。みなさんあってのおとくら、いっぱいおとくらで楽しんでください。

指導教員より（抜粋）

環境科学部 迫田正美

中心的な活動である喫茶・ギャラリー運営・イベント活動が思うように行えなかったことは辛い経験だったと思う。また、2年以上コロナが続く中で経験を積めないまま学年が進むことで、経験者が引退、卒業していくことは「おとくら」の存続、活動の意義の継承という楽座グループにとっての命綱を細めてしまうことに危惧を抱かなければならない状況も生まれている。来年度は経験者が非常に少ない中で活動を繋いでいく工夫が必要だと考える。どのような活動なら実践できるのか、関わっていただいている地域の方々とも相談しながら方法を見つけていくことが重要である。下級生やOG、OBを含めた「おとくら」に関わっていただいた方々を参加者に想定したオンラインイベントを工夫してみることも、危機を克服するための対策となるのではないかと。例えば、「おとくら」メンバーだけでなく、OB、OGにも声をかけて、近年の活動内容や展示会の記録、思い出を語る、というオンラインイベントを参加者ごとにコーヒー（好きな飲み物とお菓子など）を準備してもらいながら開催するなど、「おとくら」の魅力をメンバーみんなで再確認できるようなイベントである。また、喫茶営業のノウハウと楽しさを経験しながら下級生に伝えていくことを目的として、参加者を限定してロールプレイング的な営業イベントを行うのも一つの方法かもしれない。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・活動参加者の制限（2～4人体制での活動）
- ・人数制限による体験・見学（1回3人まで）
- ・滋賀県安心安全店舗の認証申請準備

DELIVERABLE

成果物／制作物



おとくら通信

17 内湖の再生と地域の水辺コーディネート



水辺のコーディネーター

琵琶湖の内湖である神上沼において、外来種の駆除や生物調査を行い、在来種にとって棲みよい環境をつくる活動を行っています。また、多くの学生や地域の子もたちに外来生物問題について知ってもらい、地元の水辺に親しみや興味を持ってもらえるような活動も行っています。

TEAM DATA

チーム名：滋賀県大生き物研究会

代表者：本谷匠（環境科学部）

メンバー数：14名

指導教員：浦部美佐子（環境科学部）

活動場所：学内、彦根市（神上沼）、滋賀県内

関係団体：彦根市愛西土地改良区

近江楽座活動年度：[2004](#) [2005](#) [2006](#) [2007](#) [2008](#) [2009](#) [2010](#) [2011](#)
[2012](#) [2013](#) [2014](#) [2015](#) [2016](#) [2017](#) [2018](#) [2019](#)
[2020](#)

PROJECT

実施事業

(1) 神上沼での生物調査と外来種の駆除



外来魚調査 (07/17)

(2) 大学内 環濠での駆除活動

★見出し写真：環濠での駆除活動 (06/20)

(3) 滋賀県内の生物調査



湖北地域での生物調査 ハス (07/23)

(4) 夏湖風祭への出展

(5) 外来魚情報交換会への参加

(6) 神上沼での清掃活動

1年のまとめ・考察（成果と課題）

全体として課題が多く残ったと考える。目的である学生の人材の育成については、生物採取の技術の習得・向上のような技術面ではできたが、どのような対策をすべきかや、現在の環境がどういった環境であるかについて考えられるような知識の習得・向上が不十分であった。地域の人材育成については、今年度は本団体と地域との関りがなく未達成であった。地域の公民館主催のイベントで環境啓発活動を行う予定であったが、直前で中止となってしまった。神上沼での事業では特に外来魚の繁殖期に事業を実施できなかったことが悔やまれる。昨年度も同時期に事業が実施できず2年連続で繁殖期の駆除を行わなかったことになる。これによる在来種への影響については今のところ不明である。環濠での駆除活動は何年か前に行われていたが、当時の活動がどのようであったのか、駆除はどのようにすべきかのノウハウが失われていた。しばらく行われてこなかったため仕方ない部分もあるが、これまでに培ってきた知識や記録の引継ぎがよくできているとはいえないと感じた。前身の滋賀県大 BASSER'S を含め活動を始めて10年以上が経ち、これまでの活動の記録・成果をまとめ、次の代へうまく引き継ぐことが必要だと考える。

活動を通して学んだこと

身近な場所に色々な生き物がいるということを知りました。駆除活動では外来種の根絶を達成することが難しく大変であることを学びました。これらのことは授業で習うこともなく、活動に参加して貴重な経験をするので良かったです。

後藤史羽（地域文化学科1回生）

多人数で調査などを行う面白さを学びました。今までは一人でやる事が多かったのですが、他の人の興味や経験などを知ることにより、もっと生き物に触れる機会を作っていこうと思いました。この思いを来年度の活動に活かしていく為に準備をしたいと思います。

松本優（環境生態学科2回生）

生物を対象とした調査や駆除活動の難しさです。私が活動に参加したときには、1匹も見つけられない時や、逆にどんなに捕獲してもどんどん現れる時などいろんな時がありました。この活動から、地道に活動を継続することの大切さを改めて学びました。

田代帆華（生物資源管理学科1回生）

地域からのコメント

愛知川公民館 門野佐智子さん

外来魚釣り大会のイベントは残念ながら中止となってしまいました。また機会があればぜひ滋賀県大生き物研究会の皆さんにご参加いただき外来魚問題について子どもたちにご指導いただければと思います。子どもたちにとっても実際に取組をされている方々から直接話を聞ける良い機会になると思いますのでよろしくお願いします。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・オンラインによる調査記録の整理（神上沼の利用ができない期間）

指導教員より

環境科学部 浦部美佐子

本年度は、昨年に引き続きコロナ流行のため学生活動が困難な年となりましたが、その中で10回以上の調査と外来種駆除活動を行えたことは大変な努力の結果であると思います。例年より採集努力量が小さいとのことですが、それが外来種の生息量にどの程度の影響を及ぼすことになったか、ぜひ来年度以降に分析・検討をしてみたいと思います。「生き物研究会」の活動も、前身のBASSER'Sから通算すると10年余りになりました。そろそろ、一度卒業生を招待して現在の活動の話をし、研究会の活動方針について再検討するのも良いかもしれません。考えてみてください。

18 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム



「復興」のその先へ

東日本大震災で津波の被害を受けた宮城県南三陸町田の浦地区で、復興まちづくり活動を行っています。現地での交流イベントの企画・運営を行うとともに、活動で得た繋がりや経験を滋賀県内に広めるためにイベントの広報を行っています。

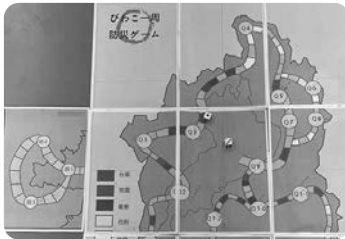
TEAM DATA

チーム名：田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
代表者：守屋優作（環境科学部）
メンバー数：19名
指導教員：鶴飼修（地域共生センター）
活動場所：滋賀県内、宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体：NPO 法人田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

- (1) 田の浦ファンクラブ通信
- (2) びわ湖一周防災ゲームの作成



NHK 大津でのラジオ収録に参加 (06/28)

- (3) 新入生説明会の開催、湖風祭実行委員会主催の部紹介イベント参加
- (4) 10年間の活動をまとめた冊子の作成
- (5) 滋賀県庁での防災ワークショップ参加
★見出し写真：ワークショップの様子 (12/11)
- (6) 3.11 キャンドルイベント



イベントにオンラインで参加 (03/11)

1年のまとめ・考察（成果と課題）

今年度は、滋賀の活動を充実させる一年となった。今年度こそは、対面の活動を再開させようと奮闘したものの、新型コロナウイルスの影響が続いたことで、計画していたイベントはすべて中止となってしまった。そのため、2年生以下のメンバーが誰も現地に行ったことがなく、悔やまれる結果となってしまった。一方で、滋賀から田の浦への活動、滋賀での活動を充実させられたことが一番の収穫だった。特に、昨年度から継続している「田の浦ファンクラブ通信」は、今年度から新体制が生まれ、作成ツールが word から illustrator に代わるなど、急速な進化を遂げてきた。後輩達には、制作する中で培ったノウハウを是非とも、今後活かしてもらいたい。コロナ前までは、滋賀での活動が少ないことが当団体の大きな課題であった。そんな中、コロナによって現地での活動がなくなってしまったことで、滋賀での活動を充実させることができ、滋賀での活動を多く生み出すことができたように感じる。来年こそは対面の活動が再開されることを祈るとともに、後輩達にはこれまでのやり方に捕らわれない柔軟な姿勢で、活動に励んでもらえたらと思う。

活動を通して学んだこと

今年はコロナ禍のため本来の活動が困難な中で、田の浦地区と繋がりを保つための活動に取り組むことができました。また、長期的な計画立てと活動実施の困難さも学ぶことができました。

大島由紀（生物資源管理学科1回生）

予算を正しく使うことの大変さです。今年度から私は会計の役職についたのですが、様々なルールが定められており、予算を使うという事の重大を痛感しました。しっかりと予算を使用し、活動をつなげていこうという自覚を持つことができました。

堀本拳志郎（地域文化学科2回生）

新型コロナウイルス感染拡大の影響により現地に行くことはできませんでしたが、田の浦ファンクラブ通信というお便りを作成して、田の浦の方に滋賀の情報をお届けしたり、繋がりを大切にすることができて良かったです。

小山花奏（環境生態学科1回生）

地域からのコメント（抜粋）

田の浦契約会 会長 佐藤功一さん

いつも遠い所から当地域を気にかけていただき、あらためて御礼を申し上げます。この度の新型コロナウイルス感染により、田の浦ファンクラブのイベントや、お茶っこの会等、コミュニティが取れず、気持ちのふさぎ込む事ばかりです。また、地域の諸行事の省略もやむを得ず、中々思うようにいなくなる事が多くなりました。しかしコロナが終息し、また前のように交流ができれば、地元の住民にも活気が出てくるとも思います。震災の悲惨さを忘れない、次の世代に伝えていく為にも滋賀の学生達との交流を続けていければと思っています。どうか月日が過ぎても後輩の学生達にこの震災の悲惨さを伝え、この地震列島でいずれ起こると言われている南海トラフ地震にも充分に対応できる備えに対しても、お役にたつ事もあるかと思えます。

指導教員より（抜粋） 地域共生センター 鶴飼修

2022年3月11日に田の浦を訪問した。学生の同行は叶わず、鶴飼1人の訪問となった。オンラインで学生達と地元の方との交流の機会を設け、一緒に黙祷を捧げた。地元の方には、学生からの問いかけに丁寧に答えていただき、当時の様子や震災の教訓を熱く語っていただいた。地元の方のご自身の体験談は、被災した「その現場（現：田の浦交流センター）」で聴く身としては大変重いものであった。そうした感覚が学生と共有できず大変残念に思う。

田の浦訪問の前に、震災後に出逢った気仙沼の学生起業家の田中惇敏さんの案内で、少子化対策として子育て支援のまちづくりに取り組む女性活動家の現場を2つ訪問した。震災時から現在までの取組をお聴きし、そして、なによりも、生かされた身としての活動への思いを生で聴くことができた。学生達とぜひ共有したい内容であった。田の浦では、お世話になった皆様へ挨拶回りをした。ご縁をいただけてから11年となるが、皆さんの変わらぬ温かい対応に御礼申し上げます。一方、田の浦でも巨大な防潮堤も完成しつつあり、歌津や志津川の風景も大分変わってしまった。変わるものと変わらぬ思い。佐藤功一契約会長（自治会長）がおっしゃっていた「教訓を忘れない。この教訓は災害列島日本のどこでも必要」「若い人たちに教訓をつたえる。交流が大事」という思いを改めて共有し、今後も活動を継続していきたいと思う。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・イベントやミーティングでの感染防止対策の徹底
- ・対面とリモートを利用した「田の浦ファンクラブ通信」の制作
- ・現地訪問や現地イベントの中止

DELIVERABLE

成果物／制作物



田の浦ファンクラブ通信



湖風便り

19 地域博物館プロジェクト



文化財を守る学生学芸員

民具や古文書、お祭りなど、地域には多くの文化財があります。“地域文化財”や地域の歴史・文化などを住民の方々とともに調べ、活用し“地域博物館”をつくりあげていくことで、地域の魅力を再発見することをお手伝いします。

TEAM DATA

チーム名：スチューデント・キュレーターズ
代表者：田代秋華（環境科学部）
メンバー数：22名
指導教員：市川秀之、東幸代（人間文化学部）
活動場所：学内、彦根市、米原市、高島市、近江八幡市
関係団体：白谷荘歴史民俗博物館
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

- (1) 近江八幡西川嘉右衛門家調査
- (2) 白谷荘歴史民俗博物館調査・展示事業



調査の様子 (04/25)

★見出し写真：整理中の資料 (11/28)

- (3) 奥伊吹調査・展示事業



展示する民家模型のモデル (01/09)

- (4) 近江八幡葦刈イベント

1年のまとめ・考察（成果と課題）

今年度の活動について、西川嘉右衛門家調査と白谷荘歴史民俗博物館調査は頻度が月に一回であったため予定通りに実施できたが、奥伊吹展示事業は新型コロナウイルス感染拡大の影響により夏季休業中の作業や多人数での作業が行えず、スケジュールが大幅に遅れてしまった。また、申請書提出時には湖風祭への参加を企画していたが、コロナ禍による展示事業の遅れを取り戻すため、今年度も参加を断念した。一方、西川家調査の調査地である近江八幡西の湖の葦を広めるため、新たに葦刈イベントを企画したが、こちらは積雪のため中止となった。活動の課題について、昨年度に引き続きメンバーの参加率が悪いことが一番の課題であった。この理由について、学業やアルバイトが忙しく活動に参加する時間が取れない、調査地が自宅から遠い、新型コロナウイルス感染拡大に対する不安が挙げられると考える。また、普段参加しているメンバーから、“展示作業よりも古文書調査の方を希望する人が多い”という意見をもらった。よって、古文書調査の頻度を多くする、短い時間でも参加できるよう活動時間・内容を調整するといった対処が必要になると考える。また、調査および作業に毎回異なるメンバーが参加しても作業がスムーズに行えるよう、調査・作業のシステム化または前回の活動内容の引継ぎ・共有を徹底していかなければならないと考える。

活動を通して学んだこと

古文書調査に参加することで古文書や古記録の読解力が身に
着いたと感じています。また、博物館の展示作業を通して地域
資料の整理や展示について学ぶことができました。これらの経
験は今後学芸員を目指す上で非常に貴重だったと思います。

十二里青慈（地域文化学科1回生）

自分の興味関心があることや積極的に学ぶ大切さに気付くこと
が出来ました。また、実際に民具や古文書に触れることができ
るという、座学ではなかなか得られない経験から、自分のスキ
ルアップにつながったと思います。

津井美咲（地域文化学科1回生）

古文書などに地域の伝統的な生活や産業の記録が残っている
ことを知りました。また、地域の産業において、需要の減少や
後継者不足などの問題が生じていることを知りました。地域の
自然環境や文化・産業などを伝えていくことが大切だと学びま
した。

杉本和奏（環境生態学科3回生）

古文書の扱い方やくずし字の読み方、整理の手順、展示の方法
等を学びました。学んだと言っても授業とは異なり、常に実践
を通しての学びだったので、より楽しく身に着けることが出来ま
した。また、私は将来学芸員になりたいと考えており、その業
務の一端を知る良い機会にもなりました。

竹田圭乃（地域文化学科3回生）

地域からのコメント（抜粋）

白谷荘歴史民俗博物館館長 川島光男さん

今年度も新型コロナウイルス感染状況拡大の影響で近江楽座の活
動も大変だったと思います。そんな中でも白谷荘歴史民俗博物館の調
査・整理・維持・保存に引き続き携わっていただいで感謝します。皆
様の活動に引っ張られて歴史民俗博物館として開館できています。琵琶
湖西北の地方の小さな博物館が開館しています。学生の皆様には実
感が薄いかもかもしれませんが、地域文化を守っていくことの基本となっ
ています。現地での活動が地域の特徴ある地方文化を守っているのです。
これからも皆様方の熱意と情熱で忘れ去られてゆく地域文化を守って
いってください。皆様方が頼りです。また、皆様方と共に特徴ある地
方の文化財を守り保存して活用することで、地域コミュニティの活性化
に役立てていきたいです。

指導教員より

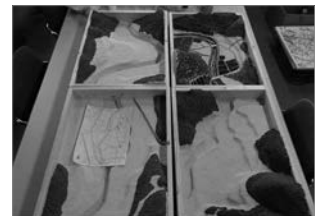
人間文化学部 市川秀之

今年度も昨年度に続きコロナ禍での活動となったが、毎月の調査活
動は例年通り継続し、米原市東草野での資料館展示作りという大きな
新しい課題にも挑戦でき有意義な一年であったと考えられる。ただ活
動に常時参加するメンバーが固定化する傾向があり、より多くの人が参
加できる仕組み作りが課題であろう。

新型コロナウイルス関連の対策 ・新たな取組

・感染防止対策の徹底

DELIVERABLE 成果物／制作物



奥伊吹展示事業で展示する景観模型

<その他成果物>

西川嘉右衛門家で解読した葉書
白谷荘歴史民俗博物館で整理した資料リスト
奥伊吹展示事業の展示計画書

20 Jesuit House Project



Jesuit House の持続可能な保全と地域活動の拠点づくり

歴史的建造物である Jesuit House を活かした地域博物館へと改修し、都市部の脆弱な地域コミュニティの新たな拠所として、地域の子も達の情操教育や地域活動、地域コミュニティが新たに生まれる場所にしていくための活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名： Jesuit House Project
代表者： 橋本京佳（環境科学部）
メンバー数： 8名
指導教員： ヒメネス・ベルデホ・ホアン・ラモン（環境科学部）
活動場所： 学内、フィリピン セブ市
関係団体： NPOFootRoots、HO-TONG FOUNDATION 他
近江楽座活動年度： [2004](#) [2005](#) [2006](#) [2007](#) [2008](#) [2009](#) [2010](#) [2011](#)
[2012](#) [2013](#) [2014](#) [2015](#) [2016](#) [2017](#) [2018](#) [2019](#)
[2020](#)

PROJECT

実施事業

- (1) 白雲館にてアクセサリー・水彩画の展示会の開催



近江八幡市白雲館で展示 (06/26)

- (2) 交流センターにてアクセサリーワークショップ・水彩画の作品展示



滋賀県立大学で展示 (11/08)

- (3) PRDP プラスチックリサイクルデザインプロジェクト
★見出し写真：リサイクルマシンの制作 (09/24)
- (4) キャンパス SDGs びわこ大会 2021 への参加

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

コロナウイルスの影響下、引き続き海外での活動が難しい現状にありました。しかし、活動形式をがらりと変えてみることで新たな活動方法を見出すことができましたと感じます。2020年度から新たな取組として切り絵のオンラインワークショップを開催し、今年度は彦根地域外の近江八幡市の白雲館で二日間にわたって水彩画とアクセサリーの展示を行いました。フィリピンで暮らす女性たちが制作したハンドクラフトジュエリーと水彩画のしおりの合計 208 作品を展示しました。また、滋賀県立大学でも展示を行いました。より多くの人に活動を知ってもらうために、SNS で Jesuit house project のアカウントを作成し、活動の様子や展示の告知、現地の写真など、活動内容が伝わりやすいような広報を心掛けました。次に今年度から始動したプラスチックリサイクルデザインプロジェクトは、フィリピン・琵琶湖では現在、河川や海、街中に多くのプラスチックゴミが廃棄されており、これらの環境問題を改善するためにリサイクルマシンの実験制作を行いました。2021年の9月から12月にかけて行われ、実際に海外でプラスチックのリサイクルマシンを制作している方の設計図面を参考に、何も分からない状態からスタートし、企業の方に指導していただきながら徐々に形となっていきました。最終的には粉砕機、インジェクション、エクストルーダーの三つの機械が完成し、ペットボトルのキャップからタイル、建築部材のプロトタイプ等を制作することができました。今後は現地にて機械制作を行いたいと考えています。

Jesuit house project は博物館保全が基となる活動ではありませんが、現在では様々な活動を現地で困っている人に焦点を当てています。海外だけでなく、日本国内でも活動を行うことができるという気づきに繋がったことが今年度の良かった点であると思います。

活動を通して学んだこと

コロナ禍でフィリピンに行けなくなり、オンラインでしか会えない状態となりました。生活に困難な子どもたちや、女性が作ったアクセサリーや切り絵など見て元気をもらえてこれからも何か力になれたらと思いました。

片岡瑞稀（環境建築デザイン学科4回生）

いまだ海外での活動が行えない中、去年に引き続き国内での展示を行えたことが良かったと感じる。プラスチックリサイクルプロジェクトでは企業の方と連携しながら、機械制作に取り組み、貴重な体験をさせていただくことができた。国内でも幅広い活動が行えることがこのような機会を通して知ることができた。

橋本京佳（環境建築デザイン学科3回生）

今回のプラスチックリサイクルの活動を通して、プラスチックゴミの現状や海洋汚染問題など、これまで知らなかったことを学ぶことが出来た。またリサイクルマシンの制作では、溶接の方法や工具の使い方など様々なことを学ぶことが出来て、実りのある活動となった。

葛輪優（環境建築デザイン学科4回生）

地域からのコメント（抜粋）

オンラインワークショップに参加された方の声

作品づくりをしている時間は、普段の悩みやストレスを忘れさせてくれる機会となっています。

コロナで大変な期間の中、ワークショップの開催をしてもらい、楽しい時間となっています。有難うございます。

指導教員より

環境科学部 J.R. ヒメネス・ベルデホ

パンデミックの2年目である2021年は、近江楽座のすべてのプロジェクトが活動を行うのに非常に困難な年でした。その中でも Jesuit House プロジェクトグループは、積極的に活動に取り組み、次の2つのプロジェクトに力を注ぎました。

1つ目は Pendiente del Destino。海外への渡航が不可能なため、ワークショップの開催方法をオンラインとし、様々な作品の制作手段を紹介しました。滋賀で2回、神戸で1回、東京で1回、セビリア（スペイン）で1回の展覧会をそれぞれ開催しました。2つ目のプロジェクトは、PLASTIC RECYCLE に焦点を当てた2021年に誕生した新しいプロジェクトです。これは家庭や地域で実施可能なプラスチックリサイクルです。リサイクルプロセス用に3つの異なるタイプのコンパクトマシンを作成し、翌2022年に滋賀と海外でマシンを活用したワークショップ開催を計画しました。

また、Jesuit House プロジェクトグループは、NPO法人 FootRoots、Ho Tong Foundation、三峰環境サービスなど、学外の団体や企業と連携しながら活動を進めました。

2021年はコロナ時代に適応した新しい活動を始動し、ポストコロナ時代につながる準備に着手できた有意義な年でした。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・仕事や学校に通うことが出来ないフィリピンの方のためのオンラインワークショップの開催（多くの方に参加してもらうことができ、アートワークを通して、自粛の期間に少しでも明るい気持ちになってもらえるような新しい交流の場を作ることができた）
- ・プラスチックのリサイクルプロジェクト（日本国内で行う新たな取組）

DELIVERABLE

成果物／制作物



作品展示ポスター

<その他成果物>

- アクセサリー・水彩画の展示
- PRDPの実験機械と
- 建築部材のプロトタイプ・タイル

21 男鬼里山集落再生プロジェクト



里山環境の再生を目指す

廃村集落・男鬼（おおり）の再生を目指すために、空き家となっている家屋の実測調査、茅や竹林といった里山的素材の調査、家屋の清掃活動、畑の実践、小規模建築物の設計・施工などを計画しています。

TEAM DATA

チーム名：オオリヤロウ
代表者：川畑太輝（環境科学研究科）
メンバー数：16名
指導教員：芦澤竜一（環境科学部）
活動場所：男鬼集落（彦根市）
関係団体：男鬼集落の家屋所有者（元住民の方）
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011
2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019
2020

PROJECT

実施事業

- 1) 拠点候補地家屋の調査
- 2) 里山の調査
- 3) 拠点候補地家屋・土地の清掃活動
- 4) 畑の実践
★見出し写真：畑を開墾（07/17）
- 5) 集落再生提案



彦根市長と打ち合わせ（11/08）

- 6) 企画書作成
- 7) 地域イベント参加



しめ縄を奉納（11/28）

- 8) ゲンザの清掃途中展開催

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

アカデミックな研究と実践的な活動の両軸を行き来しながら行うことができた。まず、神社の祭事で知り合った大久保さんの家屋と土地に対して、手を加えていく計画を策定した。その後、毎月5回のペース（計31回）で集落に訪れ、各事業を進めていった。研究ベースでは、詳細な1軒の家屋調査を通じて、軸組模型を作成し再生の議論を進めていった。実践では、民家のモノの痕跡の記録を取り、民俗学的なモノは保存し、その他のモノは状態を見ながら、焼却処分や清掃センターへの運搬を行った。清掃活動と並行して、さらに畑の実践を行った。ヤマビルやマダニといった害虫にも悩まされながら、草刈りや開墾を行い、荒廃した里山を整備していくことの難しさを痛感した。結果的には、じゃがいもを収穫することができた。この経験を活かし、来年度以降、規模を大きくしていき、いずれは、地域経済の一部となることを期待する。今年度は、協力者がほぼゼロの状態からはじまり、取材やSNSおよび地域活動への参加を通して活動を周知させ、徐々に外部関係者とのネットワークを築いていった。まだまだビジョン、お金、体制が整っておらず、廃村である男鬼集落を再生させるという大きな目標を達成するためには、ようやくスタートラインに立った状態である。しかし、今年度で、少なくとも基盤はできたと実感している。学生の持ち味である情熱をもって、外部関係者を巻き込んでいくことで、先行きの見えない課題でも乗り越えられるのではないかと考える。今後も継続して、人間関係づくりを大切にしながら、頭と身体を動かし、少しずつ整えていくことが重要であると考察する。

活動を通して学んだこと

男鬼プロジェクトに携わった半年間で、たくさんの人たちとの出会いがあり、「大学」だけでなく「建築」の枠を越えたコミュニティの広がりを実感した。何かを「実践する」ということは、さまざまな人たちとのつながりが生まれ、その一步一步がとても大切であることを学んだ。

澤木花音（環境建築デザイン学科3回生）

半年間、プロジェクトに関わって廃村再生を考えてきた中で、廃村再生とはただ建築を設計するという話だけでは解決できるものではなく、地域の人の関係を築きあげること、利益を生み出し、廃村を運営していくことの具体的な方法などを考える必要があることがわかった。

岡田大志（環境科学研究科環境計画学専攻1回生）

再生において集落がかかえる先行きの見えない課題に直面した。しかしながら、信念をもって真摯に集落の課題に向き合い活動を続けていくことでまわりの人々の支援や賛同をしていただき、活動が広がっていくことを学んだ。まだまだ始まったばかりのプロジェクトではあるが、今後も課題と向き合いながらも発展していくことを期待する。

川畑太輝（環境科学研究科環境計画学専攻2回生）

地域からのコメント（抜粋）

男鬼町 比婆神社氏子総代 大久保則雄さん

川畑君との出会いは2020年5月の男鬼町春祭りだったと思います。少しはにかんだような風貌の奥に、誠実さが見えた事を鮮明に記憶しています。以来、川畑君は求める事よりも、自分に何ができるかの視点で男鬼町、「ゲンザ」、比婆神社に向かい合ってくれました。芦澤研究室に伺ったのも川畑君への信頼があったからです。帰る度に「ゲンザ」の整備が進み、いつの間にか、私も男鬼町の再生に思いを致すようになると、自分の幼少期の原風景が蘇りました。川畑君とのベクトルが合った時でした。矢吹安子市議を通じた和田彦根市長との面談、社団法人立ち上げの検討、男鬼町現存家屋権者への説明と協力依頼等々刺激的な2年でもありました。川畑君が遅しくなって滋賀に復帰するまでに、関係者と協力して迎え入れる環境を整えていきたいと思っています。

指導教員より（抜粋）

環境科学部 芦澤竜一

男鬼プロジェクトは、廃村となって50年が過ぎ、集落の人々が再建を諦めた村を再生することを試みるプロジェクトである。リーダー川畑君をはじめ、学生メンバーが週に1度のペースで定期的に村を訪れ、家屋の実測調査や清掃、集落内の草刈り、畑の開墾など様々な活動を精力的に実践していった。コロナ禍で色々との制約はあったが、廃村という性格上人々との接触機会がそこまで多くなく、活動を何とか前を向いて実施できたのではなかろうか。同時に集落、周囲の里山の土地所有についての調査や集落の環境や歴史を関係者から聞き取り、学生達は段々と男鬼集落の魅力に惹かれていく様に感じた。今年の彦根の雪は厳しく、メンバー達は男鬼のことをとても心配していた。2月に学生達は現地へアクセスを試みたが、道路が積雪のため歩行不可能となり途中断念して引き返してきたと聞いた。男鬼の冬の厳しさも垣間見ることができ、冬季の課題を実感したであろう。また学生たちは積極的に集落行事に参画して、集落の代表者大久保則雄さんの信頼も得るようになった。彦根市長とも面会し、男鬼の再生に共感して頂き、結果大久保さんを代表理事として一般社団法人「おおりびと」の立ち上げまでに至ったことは今年度の活動の大きな成果であろう。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・少人数体制での現地活動
- ・リモートでの打合せ

DELIVERABLE

成果物／制作物



清掃途中展チラシ



じゃがいも

<その他成果物>

拠点地家屋の実測図・軸組模型、敷地模型

22 お山さんありがとうさん



里山って、恵が多いね！

里山にある資源を活用して楽しもう！里山の利用に関心のある人を増やす！そのためには、地域の特色を全面に表した、その地域だけの里山づくりをするとよいのではないかと考え、里山と関わる活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名：お山さんありがとうさん
代表者：橘啓輔（環境科学研究科）
メンバー数：5名
指導教員：籠谷泰行（環境科学部）
活動場所：彦根市（荒神山）、多賀町、長浜市（余呉町）
関係団体：おうみ木質バイオマス利用研究会、YOBISHI 他
近江楽座活動年度：[2004](#) [2005](#) [2006](#) [2007](#) [2008](#) [2009](#) [2010](#) [2011](#)
[2012](#) [2013](#) [2014](#) [2015](#) [2016](#) [2017](#) [2018](#) [2019](#)
[2020](#)

PROJECT

実施事業

- (1) 生物多様性豊かな里山づくり（協働活動）
★見出し写真：除伐作業の様子（06/27）



植栽した苗木（06/27）

- (2) マツタケの生える里山づくり（協働活動）
.....
(3) 新規予定地（清崎町方面）での活動（学生主動）



新規予定地にいたイノシシ（11/20）

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は本団体初陣の一年であり、今後の活動方針を定めることのできた一年となった。活動のきっかけは、親族の所有している山が全く管理されておらず、荒れ果てており、里山の利用に高い関心をもっていたため、全国的に起きている里山の問題を解決したいと思い本団体の設立に至った。しかし、設立当初はどの地域でどんな方法で里山の整備や利用を行うのか、方針があまり決まっていない状態だった。その状態でも、学生の期間に限られていることや、審査会は1年に一度切りであることから、半ば強行的に設立に至った。そのため、団体の設立申請時の活動計画とはかなり内容が変化した。活動を行っている中でメンバーのつてや地域の方からのお声掛けによって、荒神山3地点にて、それぞれ別の方針で整備を行っていくことが決まった。地点によって整備の方針を変える理由は、持続的な里山利用を行うためにはその地域の特色を全面に表した、その地域だけの里山にしていくことが大切だと感じたためである。現在の里山はどこも一見、スギなどの一部の木ばかりが生えているように見えがちである。これを、山菜がよく採れたり、木の実が多かったり、昆虫採集がしやすかったりなど、地域の特色を活かして、地域の方々が「こんな山だったらいいのに」と思うような山を実現し、有用性や愛着を感じてもらえるようにしていきたい。今年度は既存の団体の活動に参加する形で事業を行ってきた。その中で、整備のための考え方や方法、チェーンソーなど整備用道具の使用方法を学ぶことができた。来年度からは新規整備予定地の清崎町方面にて、学生主動の活動も行っていきたいと思う。

活動を通して学んだこと

日夏町方面の荒神山において間伐と林内清掃を行った。地元の方から、ゴミのポイ捨てを促すように野生動物が関わっていることを聞き、初めてそのような事象があること知った。また間伐について、考えていた以上に作業量が多いことを知った。里山にするために継続的な活動が必要である。

岸畑春奈（環境生態学科2回生）

山の手入れとして木を伐採する必要があるが、一つの木を安全に伐採するために、高い位置の枝の切り落としや、木が倒れる方向の調整、木を引っ張って倒すという工程があり、とてつもない労力を伴うことを実感した。

加賀考成（材料科学科4回生）

山の保全作業として木の伐採などがあることは知っていたものの、実際に行っている現場を見てはじめて、一度の作業で行える量は山の面積に対してほんのわずかでしかないことを知った。ゆえに、生物多様性が豊かな里山を実現することは、こまめに、そして継続的な働きかけが重要だと感じた。

梅田朱里（生活栄養学科4回生）

森林整備時の注意点（特にチェーンソー使用時）や、どのような森林にしたいかという将来像を持つことの大切さを学んだ。また、「里山整備の担い手不足」という地域課題を抱えている地域と、「学生主導で活動できるフィールドがない」という課題を抱える当団体を繋げることができた。

小山友梨子（環境科学研究科環境計画学専攻1回生）

地域からのコメント

おうみ木質バイオマス利用研究会 寺尾尚純さん

OMBKは、2000年度から市民活動として里山の整備と利用を通して循環型社会への提案と実践を行ってきました。その中で、折々に県立大学の学生が多くの活動に参加してくれてきました。地域に密着した活動で体感することや、多くの他人から受ける多様性など日々の活動を通して多くを学んでもらえてきたなら幸いです。今後も、学生時代の一過性の活動でなく、地域に根差して課題解決を続けてもらえることを願います。

指導教員より

環境科学部 籠谷泰行

それぞれの地域の状況に応じた持続可能な里山林の実現に向けて、チーム「お山さんありがとさん」が今年度に立ち上がった。現在の里山林の置かれている状況は決して好ましいものではないが、その中で当チームは的確な問題意識のもと、地域住民や活動団体と連携しながら積極的な活動を展開しつつある。今後の里山林管理について有効な提案がなされるものと期待できる。来年度以降の活動がさらに充実することを望む。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・里山整備活動は野外で行うことや、人同士の距離が確保されていることなどから定期的に行った。

23 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-



地域よし、学生よし、古民家よし

彦根市上岡部町にある古民家で、「地域よし×学生よし×家主よし」の三方よしの古民家活用プロジェクトを展開しています。古民家を地域交流の場、学生の学びの場として活用するため、改修作業、畑作り、交流イベントなど様々な活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名：かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

代表者：鈴木優奈（人間文化学部）

メンバー数：16名

指導教員：林宰司（環境科学部）

活動場所：彦根市（上岡部町）

関係団体：上岡部町自治会、ベストハウスネクスト株式会社

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011

2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019

2020

PROJECT

実施事業

- (1) ひょうたん加工、朝市への出店



朝市でのひょうたん販売（10/17）

- (2) 古民家でのイベント開催

★見出し写真：子どもたちの正月遊び（1/16）

- (3) 古民家改修



外壁の改修作業（12/11）

- (4) 地域行事への参加

1年のまとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度はコロナ禍になってから初のイベントを開催したり、例年行ってきたひょうたん栽培を行わず加工に専念するなど、新たな試みも多かった。そのため、初めてのことも多く計画が不十分だったことや、緊急事態宣言の影響もあり、古民家宿泊や聞き取り調査などの事業を行うことができなかった。また、前半の活動では上岡部町の回覧板に資料を挟んで地域の方々に挨拶したのみで、直接お会いすることができていなかった。しかし、11月以降は地域清掃やイベントを通して地域の方々と交流することができ、成果を感じた。

朝市への出店では、主催者の方に大変お世話になり、駐車場誘導のお手伝いをする代わりに出店料やテント代などを免除していただいた。3度出店し、売れる商品がわかってきたのが成果である。今後はクオリティを追求しつつ、新たな商品の企画、ひょうたん加工のワークショップなどの取組も行い、ひょうたんの魅力をさらに発信していきたい。イベント開催では、自治会長の太西様や町内の保護者の方々、子どもたちにご協力いただき、感染症対策を徹底したうえで無事に開催することができた。事前に綿密に計画を立て、おおむね計画通り上手く運べたと考えている。子どもたちが楽しそうに遊んでくれ、達成感を感じ、保護者の方々・自治会の会長・副会長などの方々とも交流があり、地域の人々と交流の面で大きな成果を感じた。ただ、保護者の方々への連絡事項を事前には計画することができておらず、直前になってしまったことが今後の改善点である。また、上岡部町近隣の川である愛知川と周辺地域の歴史についてまとめた資料があるので、今後、古民家での展示発表も行っていきたい。古民家改修では、床下の小動物対策ができたのが成果である。今後の課題としては、もっと古民家の良さを伝えられるような改修を考えていきたい。

活動を通して学んだこと

「自分の知らない世界に飛び込む重要性」に気づいた。部活やクラス、家族といった狭い界限でしか生きてこなかった僕にとっては、地域の方々とのコミュニケーションや改修作業のお手伝いは今後の新たな挑戦への糧になると思う。

太田黒智景（電子システム工学科1回生）

地域の方々と関わる機会が多くありました。その中で上岡部の地域のことや古民家の過去のことなどを学びました。老若男女、様々な方と行事を通して関わり、行事を終えた時の達成感や子どもたちとのコミュニケーションの難しさを学びました。

辻井大地（電子システム工学科1回生）

古民家を自由に使用できること、さらには自由に改修していくことができるなんて、大学の課外活動ならではの非常に貴重な体験であると思う。古民家や地域に対して何が出来るかを、自分たち学生のみで考え、話し合い、実行することができた。

瀧澤正真工（電子システム工学科1回生）

小さな集落だからこそ住民の結びつきが強いことを学んだ。過疎地域の上岡部では住民の交流が少ないと考えていたが、町内の子どもたちは学年関係なく仲が良くイベントには保護者でない町内会の方も様子を見に来てくださった。このような繋がりが絶えないよう少しでも貢献し続けたい。

武田奈々（国際コミュニケーション学科2回生）

地域からのコメント（抜粋）

上岡部町自治会 大西一良さん

当町も空き家が目立つようになりまして。当地域は農業振興区域で農業を推進することが必要とされた地域です。農業施策上での様々な補助や支援が得られるのですが、他方で農地以外の土地利用が厳しく制限されており、自己の保有する土地であっても事実上農地を他用途に転用する事が許可されません。息子や娘夫婦が親の自宅近くの土地(畑や田圃)を整地して新居を構えることが不可能なのです。つまり彼らが故郷に戻りたくても戻れない状況なので、農村区域がますます過疎化していく背景の大きな要因であると考えています。当町も昭和時代では70戸超の戸数でしたが今では57戸に減少し、かつ高齢者世帯が半数以上にも達しますので、あと20～30年後には数十戸しか残っていないかもしれません。当然現在まで延々と受け継いできた祭礼や地域特有の風習なども消滅していくでしょう。このような状況の中でどのような打開策が考えられるのか、国家政策上の問題点にも言及しながら地方自治体（勿論 私共の自治会を含めて）を交えて研究されてみては如何でしょうか？農業従事者が激減し、過疎化していく農村を抱える地方自治体にとって最大の課題ではなからうかと思えます。それから、古民家を維持・補修されるについては、地域のお年寄りの中には、何らかの形で地域にお返しをしたいと思っておられる方も少なからずいらっしゃいますので、何事につけても遠慮なく相談されることが一番の地域交流になるのではないかと思います。

指導教員より（抜粋）

環境科学部 林宰司

コロナ禍で活動が制約される中、できることを探すのが大変だったと思います。過去に先輩たちが行っていた事業、作り上げた資産を今一度よく見直して下さい。数年前から途切れてしまっている伝統野菜の栽培は人を集めなくても自分たちできる事業です。また、上岡部町の歴史調査資料を見直して見て下さい。自分たちで集落内を歩きながら再確認・考察することや、昔の遊びの聞き取り調査の結果から再現することなど、できることはたくさんあると思います。例年、学年の入れ替わりにより事業が単年度ごとになりがちですが、団体として継続的に課題に取り組めるよう、事業の実施の仕方を見直し、工夫して下さい。

新型コロナウイルス関連の対策

・新たな取組

- ・感染防止対策の徹底
- ・対面のミーティングを減らす（LINEの利用）
- ・イベント開催（事前申込、参加者名簿作成、参加者の検温、換気、食事禁止等）

DELIVERABLE

成果物／制作物



ひょうたんランプ



古民家改修 外壁の焼き板の張り替え

<その他成果物>

お正月イベント はごいた・こまづくり

2-2 『らくざしんぶん』

「らくざしんぶん」はチームが1年の活動をまとめた活動報告新聞です。共通トピックである①「チームのビッグニュース」②「プロジェクト紹介」③「プロジェクト自慢」④「地域の声」⑤「成果と課題」を中心に記事を作成しています。

近江楽座ホームページの「楽座文庫」に、カラー版のPDF ファイルを掲載しています。ぜひ御覧ください。

< 近江楽座ホームページ「楽座文庫」 >
<http://ohmirakuza.net/books/>

01 政所茶レン茶

2022年3月31日

政所茶新聞

発行 政所茶レン茶
 編集 近江楽座
 発行所 近江楽座

政所茶レン茶とは

政所茶レン茶とは、近江楽座が主催する、近江楽座の活動報告新聞です。近江楽座の活動報告新聞として、近江楽座の活動報告を伝えるとともに、近江楽座の活動の魅力を伝えることを目的としています。

新パッケージ登場!

今年からは、新パッケージが登場しました。新パッケージは、近江楽座の活動報告新聞として、近江楽座の活動報告を伝えるとともに、近江楽座の活動の魅力を伝えることを目的としています。

コロナとの闘い

今年度は、コロナ禍の影響を受け、活動の場が限られてしまいました。しかし、近江楽座のメンバーは、オンラインでの活動や、近江楽座の活動の魅力を伝えることを目的として、様々な工夫を凝らして活動を行いました。

地域の声

近江楽座の活動は、地域の文化や伝統を伝えることに貢献しています。近江楽座の活動を通じて、地域の文化や伝統を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

活動の振り返り

今年度の活動を振り返ると、近江楽座のメンバーは、様々な困難を乗り越え、近江楽座の活動の魅力を伝えることに成功しました。近江楽座の活動を通じて、地域の文化や伝統を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

02 県大ラジオ部

2022年3月31日

県大ラジオ部

発行 県大ラジオ部
 編集 近江楽座
 発行所 近江楽座

今年度から活動開始

2020年度の活動報告新聞として、今年度から活動を開始しました。今年度の活動を通じて、近江楽座の活動の魅力を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

県大ラジオ部とは

県大ラジオ部とは、近江楽座が主催する、近江楽座の活動報告新聞です。近江楽座の活動報告新聞として、近江楽座の活動報告を伝えるとともに、近江楽座の活動の魅力を伝えることを目的としています。

銀座街での公開放送

今年度は、銀座街での公開放送を行いました。公開放送を通じて、近江楽座の活動の魅力を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

エフェクトによる放送開始

今年度は、エフェクトによる放送を開始しました。エフェクトによる放送を通じて、近江楽座の活動の魅力を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

地域の声

近江楽座の活動は、地域の文化や伝統を伝えることに貢献しています。近江楽座の活動を通じて、地域の文化や伝統を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

活動の振り返り

今年度の活動を振り返ると、近江楽座のメンバーは、様々な困難を乗り越え、近江楽座の活動の魅力を伝えることに成功しました。近江楽座の活動を通じて、地域の文化や伝統を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

03 とよさと快蔵プロジェクト

発行日 2022年3月31日

近江楽座

とよさと快蔵プロジェクト

夏の改修作業

今年度は、夏の改修作業を行いました。改修作業を通じて、近江楽座の活動の魅力を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

とよさと快蔵プロジェクトとは

とよさと快蔵プロジェクトとは、近江楽座が主催する、近江楽座の活動報告新聞です。近江楽座の活動報告新聞として、近江楽座の活動報告を伝えるとともに、近江楽座の活動の魅力を伝えることを目的としています。

個展「快蔵のおすそわけ」

今年度は、個展「快蔵のおすそわけ」を行いました。個展を通じて、近江楽座の活動の魅力を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

地域の声

近江楽座の活動は、地域の文化や伝統を伝えることに貢献しています。近江楽座の活動を通じて、地域の文化や伝統を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

今年の活動を振り返って

今年度の活動を振り返ると、近江楽座のメンバーは、様々な困難を乗り越え、近江楽座の活動の魅力を伝えることに成功しました。近江楽座の活動を通じて、地域の文化や伝統を伝えることができ、地域の活性化に貢献しています。

3 共通プログラムの報告

3-1 中間報告会

2021年度近江楽座中間報告会を12月14日から17日の4日に分けて開催しました。新型コロナウイルス感染防止の制限がある中、チームが前期に行ってきた活動を報告し、それぞれの課題や活動で得た経験・学びを共有しました。中間報告会の様子を動画で撮影し、YouTubeで限定公開しています(近江楽座HP: <http://ohmirakuza.net/> から参照ください)。

日時: 2021年12月14日(火)～17日(金)
 各16:30～18:00または18:10～19:40
 会場: 湖風会館(A7棟) 談話室、会議室
 参加者: 約60名

<プログラム>

1. 各チームからの活動報告
2. 「活動記録シート」へのコメント
3. コメントの共有

中間報告会 参加者のみなさまへ

プログラム

1 チームの活動報告
 (1チーム5分、合計約30分)

※各チームの活動内容を事前に準備し、発表用の資料を提出していただきます。

- 第2部でコメントを書きやすいよう、スラッシュをあらかじめ用意をお願いします。
- 発表時間は1チーム5分です。開始3分後に1回、5分(終了時)で2回、ベルを鳴らします。

プログラム

2 「活動記録シート」へのコメント
 (20分程度)

※会場に各チームの「活動記録シート」を配布しています。発表後、各チームの発表内容や感想などのコメントを出します。

- 第1部での発表を聞いた上で、各チームの「活動記録シート」に、フセンでコメントを貼っていきます。質問や共感した点、参考になった点などをあげ、活動記録シートの横に貼りだしていきましょう。

【色分け】 黄：質問 赤：共感 緑：その他

プログラム

3 コメントを共有
 (30分程度)

※発表されたコメントを、1チームにつき1・2倍ずつ紹介し共有します。チームから返事や確認などあれば発表していきましょう。

プログラム

4 アンケート

- アンケートへのご協力をお願いします。記入後はアンケート回収BOXへ。

※中間報告会の様子を撮影します。撮影した映像は後日、YouTubeでの公開を予定しています。

<中間報告会日程>

	12/14(火) 6限(18:10-)	12/15(水) 5限(16:30-)	12/16(木) 5限(16:30-)	12/17(金) 6限(18:10-)
1	ボランティアサークル Harmony	政所茶レン茶'ー	BAMBOO HOUSE PROJECT	鳥大ラジオ部
2	廃棄物バスターズ	あかりんちゅ	とよさだプロジェクト	とよさと快慶プロジェクト
3	座・沖島	未来看護塾	たけともミライ	沖島やYUBOKU HUT プロジェクト
4	滋賀県大まき物研究会	オオヤキヤウ	Jesuit House Project	Taga-Town-Project
5	田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム	お山さんありがとさん	かみおかべ 古民家活用計画	おとくらプロジェクト
6			フラワーエネルギー 『なの・わり』	地域博物館プロジェクト
7				竹林GAKU

1日目(12/14)

23チームのうち、ボランティアサークル Harmony/ 廃棄物バスターズ/ 座・沖島/ 滋賀県大まき物研究会/ 田の浦ファンクラブ学生サポートチームの5チームが発表を行いました。

質問・コメントの共有では、学習会をZoomで行っていることへの共感(卒業生が気軽に参加でき、メンバーの参加者も増えた)、学生の参加を増やす工夫(大学の行事と重ならない、参加しやすい日を選ぶ、早めに日程を伝えるなど)、コロナで地域へ出向けないため通信を発行している、活動の調査データの公表等について意見交換を行いました。全体を通して、発表会を通じて学生同士、活動の横のつながりを是非、増やしてほしい(調査データの活かし方や学校に向向いの学習会で知り合った人のつながりなど)、活動をどんどん発信してほしい、世界はつながりや関係で出来上がっている、君たちの活動はそのつながりをつくっていくもの(地縁活動)、通信を発行して行けないけれど気にかけて、思いをはせることもそう、データを公表することでみんなの意識も広がる等、再確認しました。



チームの活動報告



活動記録シートへのコメント



学生の進行によるコメント共有

| 2日目 (12/15)

23チームのうち、政所茶レン茶[®] / あかりんちゅ / 未来看護塾 / オオリヤロウ / お山さんありがとうさんの5チームが発表を行いました。

質問・コメントの共有では、パッケージデザインの工夫、広報の仕方、連携イベントのきっかけ、引継ぎの工夫（経験のある上回生に教えをこう）、想定外の出来事、行政との連携、活動を継続していくしくみ（外部を巻き込んで組織を大きくしていく）、地域への活動の引継ぎ方等について意見交換を行いました。全体を通して、コロナ禍の中でも自分たちで出来ることを工夫して活動している、新規活動だけでなく継続している活動も新たなつながりを模索し、新たな展開が生まれている、楽座以外で周囲の方々との連携等、再確認しました。

| 3日目 (12/16)

23チームのうち、BAMBOO HOUSE PROJECT/とよさらだプロジェクト/たけともミライ/Jesuit House Project/かみおかべ古民家活用計画/フラワーエネルギー「なの・わり」の6チームが発表を行いました。

質問・コメントの共有では、地域の子どもたちに使ってもらっているのがよい、近くの農家の方から教えてもらったり、交流している、ここまで長く活動が続いたのがすごい、コロナで地域の方にきちんとあいさつができなくてもどかしい、コロナの中でも海外での活動を続けていてすばらしい、展示をみて活動がよくわかった、子ども向けのイベントを自分たちも企画してみたい等、意見交換を行いました。全体を通して、コロナの中でも、野菜を育てたり菜の花の栽培をしたり、次へのつながりづくりをしっかりとやっている、活動の終わり方を考えるのもいいのではないかと（バックキャスト思考）、シュ

リンクしていく社会の中で、うまく閉じていくことを考える、マスメディアを使ってもっと発信してほしい、広報をするのは自分たちの活動を広めていきたいからで、いろんな人とつきあうことが広報につながる等、再確認しました。

| 4日目 (12/17)

23チームのうち、県大ラジオ部 / とよさと快蔵プロジェクト / 沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト / Taga-Town-Project / おとくらプロジェクト / 地域博物館プロジェクト / 竹林 GAKU の7チームが発表を行いました。

質問・コメントの共有では、安全第一で無理をしないよう進めている、情報を共有するしくみ、外から地域に入っている方も何かしたい、取材をして今まで知らなかった地域の魅力を発見した、他の楽座団体ともコラボして情報発信したい、ギャラリースペースを活用したい、地域の方の期待と学生のやりがい、関係が深まり、やりがいを感じる、コロナ対策として分散・少人数で活動、マスコットキャラクターがいい等、意見交換を行いました。全体を通して、自分たちでお金を稼いで活動を回していく、いいものを提供して、その対価としてお金をもらう、そういうことを意識してほしい、他とつながって活動すると、もっともっと高まっていく、社会人と同じくらい地域の中でクオリティのある活動をしている、活動している日常の風景が目に見える、地域と一緒に活動している日常の風景が目に見える、地域と一緒に活動している日常の風景が目に見える、誇りを持って活動してほしい、自分たちがやっていることを後輩に託してほしい等、再確認しました。

3-2 活動成果報告会



2021年度近江楽座活動成果報告会を4月20日、21日、22日の3日に分けて開催しました。また、「とよさと快蔵プロジェクト」が公益財団法人電通育英会の令和4年度の助成団体に選ばれ、1日目冒頭に、廣川理事長より助成決定の伝達が行われました。

日時：2022年4月20日(水)～22日(金)

各16:30～18:00

会場：滋賀県立大学 湖風会館 会議室・談話室

参加者：64名

｜電通育英会助成決定伝達式(4/20)

電通育英会は1963年に株式会社電通により設立された奨学財団で奨学金の給付・貸与を行っており、またNPO法人や大学内組織など非営利団体が行う次世代リーダーを育成する活動に対して

年間10件程度、助成を行っています。

とよさと快蔵プロジェクトでは、今回の助成事業で、空き家を改修するだけでなく、そのフィールドを生かしたワークショップを企画・運営し、コロナで課題となっている地域の人との交流や人材育成を進めていく予定です。

< 決定内容 >

団体名：近江楽座 とよさと快蔵プロジェクト
助成活動名：「とよさとの空き家改修の現場を生かしたまちづくり人材の育成」

助成金額：60万円

助成期間：2022年4月1日～2023年3月31日



伝達式の様子

｜1日目(4/20)

司会進行：平岡俊一先生(環境科学部)

< 発表チーム >

- ・とよさと快蔵プロジェクト

人とのつながりをつくるため、個展「快蔵のおすそわけ」を開催。今後、月1回のワークショップと拠点をつくって古着のリメイクを計画。

- ・県大ラジオ部

部員が26名、機材も購入できた。商店街を取り上げてもらってうれしい、活動を取り上げてほしいなど反響があった。

- ・たけともミライ

展示会を学内と滋賀県立美術館で開催。見学して、こういうプロジェクトは終わっていくのが大事だと感じた。

- ・フラワーエネルギー「なの・わり」

このプロジェクトは、いろんな観点からとらえることができる。花を育てる、出前授業、実から油を搾る、それでディーゼルエンジンを動かす、いろんな面白味がある。

- ・ボランティアサークル Harmony

活動のモットーは、ボランティアなので無理をしないこと。そこを踏まえて活動することで、みんな楽しく参加できる。無理をしないことが継続性の原点。

- ・Taga-Town-Project

学生勧誘のイベントをやっていきたい。魅力的な活動なので、是非PRしてほしい。

- ・竹林GAKU

いろんな団体とつながりをつくって活動している。ポイントは余裕を持って準備をしていくこと。

| 2日目 (4/21)

司会進行：柳澤淳一先生（工学部）

<発表チーム>

- ・あかりんちゅ

コロナで、離れたところからでも簡単に取組める活動を SNS とかで発信できるのではないかと感じた。火を使うので安全対策に気をつけてほしい。

- ・未来看護塾

健康に関して地域のニーズは高い。小規模な集まりに出かけていってとか、小さなイベントを数多く行うのもよいのではないかと。

- ・廃棄物バスターズ

湖岸の清掃活動とゴミ調査を実施。「ポイ捨て見える坊や」という看板を制作。看板を立てたところのゴミが周りに比べ少なくなり、効果が表れた。



活動報告の様子



活動報告の様子

- ・BAMBOO HOUSE PROJECT

竹の工作物の 8 年程度経過したものは傷みがひどくなっている。耐久性や安全面について研究室の先生に指導してもらって、まず学生が確認して地域の方と連携して行っている。

- ・滋賀県大生き物研究会

魚釣り大会が中止になって、地域と関わる活動が出来なかった。環濠のウシガエル（幼虫）をカニカゴを使って駆除した。

- ・田の浦ファンクラブ学生サポートチーム

滋賀で活動を行い、田の浦ファンクラブ通信を発行、琵琶湖一周防災ゲームを開発した。

- ・スチューデント・キュレーターズ

休校中の学校を活用して奥伊吹東草野の資料室をつくる準備を進めた。自分たちで活動をアピールする場もあればいいのではないかと。

- ・お山さんありがとうさん

地域ごとの特色づくりをして里山が持続的に使

われることをめざして活動。地域の方に指導してもらっている。学生主導で活動できるフィールドの目途もついた。

| 3日目 (4/22)

司会進行：原未来先生（人間文化学部）

<発表チーム>

・政所茶レンジャー

ネット販売により、遠方のお客さんにもお茶を届けることができるようになった。収穫したお茶は1年間で売り切っているかどうか（煎茶はほぼ、番茶、ほうじ茶は余っている）。

・とよさらだプロジェクト

ビニールハウス1棟分と路地を役場から借りている。現場へはメンバーの車で、ない時は自転車で30～40分かかる。

・沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト

地域の方と意見交換の場をもった（休憩所があるのはありがたい）。地域の祭りに学生が参加して盛り上げていきたい。学生がCGとか使いながら自分たちで設計している。

・座・沖島

畑はテニスコート半面ぐらいの大きさ。地域の方との関りが活動の魅力。コロナでそれが出来なかった。

・おとくらプロジェクト

滋賀県の認証を取得して、5月から喫茶営業を再開予定。定期的に研修をし、換気等、県の指導を遵守している。

・かみおかべ古民家活用計画

おとくらとも共通点多い。ひょうたんの委託販売、是非、おとくらでやっていただけたら。夏休みに子どもたちを集めて宿題会もいいのでは。

・オオリヤロウ

里山を再生していくには、山の整備など大がかりになるので、法人化したい。法人が出来ても、

楽座としての学生の活動は続けたい。

・Jesuit House Project

近江八幡の白雲館と大学内ではじめて展示会を行った。現地とのコミュニケーションを行っているNPO団体があり、そこと連携して活動している。

| 全体コメント（印南比呂志先生：委員長）

近江楽座の活動が20年目に突入する。決して平穩に続いてきたわけではない。4代の学長が変わる中で、授業でもない、部活でもない新しい価値観を持って続けてきた。その間に東日本の大震災があり、今回のコロナがあった。昔よりも授業の負担は重くなっているが、学生たちはよくがんばっている。是非、後輩たちにも伝えていってほしい。



印南先生コメント

4 学生有志活動

4-1 WEB オープンキャンパス

2021年度のオープンキャンパスは対面とWEBの両方で実施されましたWEB オープンキャンパスのサイト内では近江楽座も紹介されました。

掲載内容：

- 近江楽座の紹介
- 動画「近江楽座プロジェクトギャラリー」
- 学生の活躍（さまざまな分野で活躍する学生を紹介）
 - ・ ボランティアサークル Harmony
 - ・ 廃棄物バスターズ
 - ・ 政所茶レン茶TM
 - ・ 地域博物館プロジェクト
 - ・ フラワーエネルギー「なの・わり」
 - ・ 滋賀県大生き物研究会
 - ・ おとくらプロジェクト
 - ・ Taga-Town-Project



WEB オープンキャンパス
近江楽座ページ

4-2 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」

滋賀県と協定を締結し、県営住宅の空き住戸を活用して地域コミュニティの活性化を図る取組みを進めました。本年度は、令和2年度から3か年の期間の2年目にあたります。

活動は3つの柱からなり、1つがシェアハウス。学生が実際に団地で暮らしながら地域での共同活動を進めました。2つ目が、学生活動の拠点「楽座ルーム」の利用・運営。3つ目は、地域に向けてのイベントの開催です。今年は、残念ながらイベントは実施できませんでした。

売準備など、作業や保管管理を中心に年間38回の利用がありました。

｜シェアハウス

2戸のうち1戸に2名の学生が入居し、生活しながら階段の清掃や草むしり等の共同活動、町内会費の集金などの活動を行いました。残りの1戸は都合により本年度の入居募集を停止しました。

学生からは、「同じ場所で人と暮らす」とき、相手への感謝と気遣いの大切さを、シェアハウスや団地での貴重な生活体験から気づかされたという報告がありました。感謝と気遣いの気持ちを行動で示すことがお互いを許容しやすくし、心地よい暮らしへとつながっていくのだという気づきです。

また、コロナという半強制的な隔離生活の中で、日常の何気ないあいさつや、井戸端会議など偶発的な交流を団地生活の中で見出し、自分を含め多世代が交流する豊かさを感じることができ、とても有意義な学生生活を送ることができたとのことでした。

｜「楽座ルーム」の利用・運営

コロナ禍で調理や飲食を伴う活動が制限されたため、十分な活動が行えない中でも、キャンドル製作やお茶の袋詰め、荷物回収や在庫整理、販

5 その他トピックス

5-1 表彰

近江楽座「たけともミライ」が、一般社団法人学生サポートセンターが主催する令和3年度（第19回）「学生ボランティア団体助成事業」の「学生ボランティア活動体験レポート」の募集にて優秀レポートに選ばれ、活動助成金（10万円）が贈呈されました。

応募者は代表の里本麗さん（環境建築デザイン学科4回生）で、タイトルは「被災地支援と私たちにできること」。2011年に始まった「たけとも」の活動から「たけともミライ」に引き継がれた10年間の被災地支援の取組と自分自身の経験を踏まえて、ボランティア活動について考察されています。里本さんのレポートは、優秀レポート（10件）の中で特に優れたレポート（3件）に選ばれました。優秀レポート一覧と里本さんのレポートを含む3件の特に優れたレポートが、一般社団法人学生サポートセンターの下記WEBサイトに掲載されています。

http://www.gakusei-sc.or.jp/pdf/r3bo_1.pdf

ボランティアサークル Harmony が、メロディとともにやっている油絵制作の定例活動で子どもたちが描いた作品が、滋賀県内の障がいのある方の造形作品を募集した「第11回 障害のある人による公募作品展 ぴかつtoアート展」にて大賞と審査員特別賞を受賞しました。



第12回びかつtoアート展（2022開催）のチラシ（第11回びかつtoアート展で大賞を受賞した藤本湊也さんの作品「魅惑のバターナッツかぼちゃ」が採用されています）

5-2 滋賀県安心安全店舗の認証

コロナにより本年度は、飲食を伴う活動が制限されていましたが、滋賀県の安心安全店舗認証制度の認証を受けることで、限定して活動が認められることになりました。とよさと快蔵プロジェクトがその認証を受け、学生のみで経営している Bar タルタルーガを 2022 年 2 月に、2 年ぶりに復活させることができました。休業中は店内の清掃や棚づくり、メニューの開発など、リニューアルオープンに向けて準備を進めてきました。再開した際は町の人や常連だったお客様に来て頂き、コミュニケーションの拠点となる場所として重要性を再確認することができました。お客様とのつながりを大切にしながら、快蔵プロジェクトと地域の架け橋となることを目指して活動しています。



とよさと快蔵プロジェクト Bar タルタルーガ再開

同じく、おとくらプロジェクトも、喫茶営業の再開に向けて、認証を受けるための準備を進めました。（その後、認証を受け、約 2 年ぶりの 2022 年 5 月 7 日から営業を再開しています）。

5-3 地域との新たな関わり

2021年度、新たに5つのプロジェクトが近江楽座に加わり、地域との新たな関係を築きました。

「県大ラジオ部」は、人と地域を繋ぐ交流や情報の発信をテーマに掲げ、エフエム彦根で自主制作番組を放送しました。彦根銀座商店街で取材など行い、えびす講開催時に公開放送を行いました。

「沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト」は、RYUBOKU HUT という造形物の整備やメンテナンス、イベント等を通して沖島と大学との継続的な交流をつくることを目的としており、自治会のイベントに招いていただき、沖島の文化祭にも参加しました。

「犬上川竹林整備プロジェクト」は、地域団体と共に犬上川河辺林を中心とした放置竹林の整備を行っていますが、近江八幡市円山町でヨシの保全を行っている「まるやまの自然と文化を守る会」が主催する竹とヨシを使ったイベント「第1回ヨシフェス」に「あかりんちゅ」と協力して参加しました。

「男鬼里山集落再生プロジェクト」では、男鬼集落にある歴史的な民家を再生することを目的に、民家と敷地の清掃活動を行い、地域の「しめ縄奉納会」の際に展示会を開催しました。足繫く男鬼集落に通い、ひたむきに活動することで地域の関係者との信頼関係を築いています。

「お山さんありがとさん」では、荒神山の三地点で里山整備を行う既存の団体の活動に参加する形で事業を行い、その内の一地域で学生主導で活動できるフィールドを確保しました。

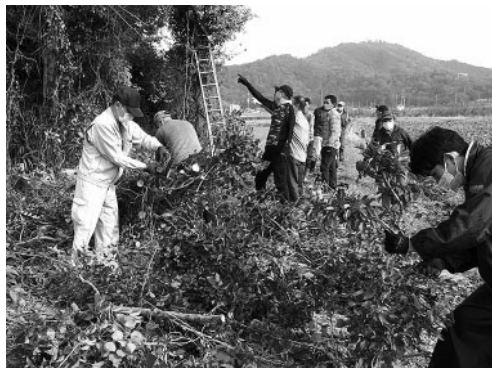
一方、コロナのためこれまでと同様に地域と密着した活動を進めることが難しくなる中、創意工夫を働かせて地域との新たな関わり方を見出す動きも見られます。

「おとくらプロジェクト」では、喫茶営業の休止


や各種イベントの中止によって地域の方々との関わる機会が激減してしまいましたが、高宮歴史研究部会という地域団体の活動に参加する形で新たに地域とのかかわり方を築くことができました。

「かみおかべ古民家活用計画」では、地域の方々との交流が減る現状を改善しようと、地域の小学生を対象とした正月遊びのイベントを開催し、2年ぶりに古民家でイベントを復活することができました。また、地域の清掃活動に参加させていただき、地域の方々との交流を深めました。

他にもコロナとは関係なく、これまでの活動が地域の人たちに知ってもらって、活動がさらに周辺へと広がった取組も出てきています。「BAMBOO HOUSE PROJECT」では、活動拠点の「竹の庭」隣の個人所有の竹林の持ち主から、ぜひうちの竹林も整備してほしいという依頼を受け、学生とまちづくり協議会の方々などで竹林整備を行いました。



かみおかべ古民家活用計画 地域の清掃活動に参加



情報発信

| 近江楽座ホームページの運営

URL : <http://ohmirakuza.net/>

滋賀県立大学における、学生の地域活動に関するポータルサイトでもある近江楽座ホームページの運営を行い、随時最新情報を更新しています。

<楽座文庫等への追加コンテンツ>

「近江楽座 活動報告書」、「近江楽座 START BOOK(キャンパスガイド)」、活動紹介動画「2020年度近江楽座プロジェクト ギャラリー」等を追加

| 活動紹介リーフレット 2021

デザイン : 川崎恵李

取材協力 : 佐野文亮、西陽来

近江楽座プロジェクトで活動する学生に依頼し、近江楽座全体の取組や、2021年度近江楽座に採択されたAプロジェクト22件とBプロジェクト1件を写真入りで紹介するリーフレットを作成しました。リーフレットのデザインと近江楽座OB・OGにインタビューした「-VOICE-先輩の声」の取材は近江楽座で活動する学生に協力いただきました。

リーフレットは近江楽座ホームページの楽座文庫からご覧いただけます。



近江楽座活動紹介リーフレット 2021

| CAMPUS GUIDE 2022

キャンパスガイドに近江楽座の活動を紹介したブックインブック「近江楽座 START BOOK」を制作しました。



近江楽座 START BOOK

| 活動紹介動画の作成

コロナで人が集まり交流することが制限される中、近江楽座では各プロジェクトの取組の動画配信に力を入れ、学内外へ学生たちの活動を積極的に発信しました。

2020年度の近江楽座チームの取組をまとめた動画「2020年度 近江楽座プロジェクトギャラリー」を作成し、WEBオープンキャンパスに合わせて配信しました。

<掲載ページ>

<http://ohmirakuza.net/information/2020team/movie/>



7 付録

7-1 プログラム推進メンバー※

事業推進代表者

滋賀県立大学理事長 廣川能嗣

事業推進責任者

近江楽座専門委員会 委員長 印南比呂志

近江楽座専門委員会

環境科学部

浦部美佐子

林宰司

平岡俊一

金子尚志

迫田正美

工学部

河崎澄

柳澤淳一

人間文化学部

石川慎治

印南比呂志

佐々木一泰

原未来

人間看護学部

伊丹君和

横井和美

地域共生センター

鵜飼修

近江楽座事務局

秦憲志

前川瑛美梨

森久友紀子

※ 2021年度(2022年3月末時点)

このほか、近江楽座に関わり支援いただいたすべての方にお礼申し上げます。

7-2 メディア掲載一覧

No	日時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
1	2022.2.11	とよさと快蔵プロジェクト	滋賀彦根新聞	職人の技で仕上げた雛人形 豊郷5カ所で県大生の創作も
2	2022.3.3	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	湖東彩る春 ひな飾りめぐり 町民寄贈や雛匠の新作 豊郷6カ所で遊び心入れ展示
3	2022.1.30	BAMBOO HOUSE PROJECT	中日新聞	竹の遊び場 これからも 県立大生ら湖南で補修や拡充作業
4	2021.10.11	あかりんちゅ	"マイナビ学生の窓口特集 大学生と考えるSDGs"	リサイクルキャンドルで「エコでスローな夜を」～滋賀県立大学 あかりんちゅの取り組み～
5	2021.8.17	ボランティアサークル Harmony	京都新聞	ボランティアサークル Harmony 作品展示会 開催中
6	2021.12	ボランティアサークル Harmony	広報ひこね	第19回障がい児・者とともに集う音楽会「ハーモニー & メロディークリスマスコンサート」
7	2021.12.8	未来看護塾	ZTV 彦根放送局	おうみ!かわら版彦根「応援!生き生き健康生活」イベントの様子
8	2022.2.5	沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト	Youtube/a-forum/ 第2回 AND 賞最終選考	AND 賞の最終選考
9	2022.3.1	沖島 RYUBOKU HUT プロジェクト	HP/a-forum/ 第2回 AND 賞	プロジェクト概要と選考評
10	2021.9.10	Taga-Town-Project	京都新聞	郷土食発信 地域の誇りに 多賀の住民団体 チラシ・本発行
11	2021.10.18	廃棄物バスターズ	朝日新聞	2050年を描くマイクロプラスチックストーリー 上映会
12	2022.2.22	廃棄物バスターズ	びわこ放送	海と日本プロジェクト in 滋賀県
13	2022.2.22	廃棄物バスターズ	毎日新聞	びわこ放送「海と日本プロジェクト CHANGE FOR THE BLUE」
14	2022.2.22	廃棄物バスターズ	中日新聞	BBC びわ湖◇海と日本プロジェクト CHANGE FOR THE BLUE
15	2022.2.22	廃棄物バスターズ	京都新聞	今日の BBC 海と日本プロジェクト CHANGE FOR THE BLUE
16	2021.10	座・沖島	さとのかぜ通信 Vol.2 号	「滋賀県立大学近江楽座『座・沖島』」～近江八幡市沖島にて～
17	2021.6.25	おとくらプロジェクト	京都新聞	切り絵、モチーフ多彩 おとくら 県立大生が作品展 彦根
18	2021.6.26	おとくらプロジェクト	中日新聞	アニメや動植物 切り絵に 県立大生 武立さん作品展
19	2021.10	おとくらプロジェクト かみおかべ古民家活用計画	広報ひこね	地域に開かれた大学～学生の学びが地域や社会を明るくする
20	2021.11.26	おとくらプロジェクト	中日新聞	懐かしの高宮を振り返る
21	2021.11.27	おとくらプロジェクト	ZTV 彦根放送局	西村佳子 作品展「語感遊び」
22	2021.10.21	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	NHK 大津 おうみ 630	【しが防災応援団】びわ湖一周防災ゲーム
23	2022.3.8	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	京都新聞	交流11年「被災地への思い不変」 県立大生グループと南三陸・田の浦地区 コロナ禍、オンラインで支援模索 寄付募り返礼ワカメで PR

No	日 時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
24	2021.11.12	オオリヤロウ	京都新聞	廃村再生! 県立大生ら奮闘 彦根・男鬼集落 宿泊などに活用 自ら顧みる場に
25	2022.1.1	オオリヤロウ	滋賀彦根新聞	日本の原風景「男鬼町の歴史と原風景」
26	2021.12	近江楽座	SHIGA SDGs Studios +[PLUS] Booklet 2021	滋賀県 環びわ湖・大学 SDGs マップ 2021
27	2022.2	近江楽座	はっさか 第 54 号	県大 SDGs の推進と学生の活動、そして活動支援 その 1 近江楽座の取組

7-3 新型コロナウイルス感染拡大防止のための近江楽座活動指針

本指針は、近江楽座の活動において新型コロナウイルスの感染拡大防止のため対応すべき事項を示すものです。

自分と仲間、関係する地域の人たちの生命と健康を守ることを第一に、リスク管理を徹底し、地域との関係や感染情勢を考慮し、どのような活動ができるのか十分に留意して、活動を行って下さい。本指針が守られない場合は活動休止を求めることがあります。

1. 基本事項

- ・「クラブ・サークルなどの課外活動指針（以下、「課外活動指針」という。）」（学生支援センター）に基づき、本指針により進めること。（課外活動指針による課外活動計画書・課外活動報告書は近江楽座のプロジェクト申請書等で対応することとし、提出は求めません。）
- ・感染拡大防止策（「新しい大学生生活ガイド～Save your life～」）を遵守して活動すること。
- ・地域の方々や団体等と感染拡大防止を踏まえた活動方針を協議して進めること。

2. 遵守すべき事項

(1) 活動計画・実績報告書の提出

- ・活動計画・実績報告書（別紙様式）を毎月15日までに作成して事務局あて提出すること。

(2) 打合せや活動における感染防止対策

- ・打合せや活動は学内外に関わらず、人数に応じて3密（密集・密接・密閉）を回避できる身体的距離を保てる場所で行うこと。
- ・活動前後には必ず石鹸による手洗いを行うこと。石鹸がない場合は、アルコール等で確実に手指消毒すること。

- ・マスクを必ず着用し、真正面でも向き合っでの会話や大声の会話は控えること。
- ・屋内ではこまめに換気を行うこと。
- ・事前に資料を配布する等、打合せ時間が長くないようにすること。
- ・活動前後の学内外での特に飲食を伴う集まり、飲み会、食事会を控えること。

(3) 地域活動における感染防止対策

- ・活動を実施するにあたり、地域の方や連携する団体と十分に相談しながら、感染拡大防止策を講じること。
- ・地域には子どもや高齢者もおられることから、人と関わる活動は感染防止に十分に努めること。
- ・3密を避ける場づくりを徹底すること。人数制限等、活動する場所に応じた対応を図ること。
- ・人と場所、時間の配分を考慮すること。万全な準備と作業や内容の分散、リモート技術の活用など、活動スタイルの工夫を図ること。

(4) 体調管理の徹底

- ・活動に参加する学生は自己の体調管理を万全に行うこと。日常においても、感染リスクを極力避ける生活を心がけること。
- ・活動を始める前には、参加メンバー全員の体調確認を必ず行うこと。発熱や風邪の症状、嗅覚・味覚異常などの体調不良の場合の参加は認めない。
- ・活動中にこうした症状が見られた場合、速やかに事務局に連絡するとともに、帰国者・接触者相談センターに相談すること。

(5) 施設・設備の管理、第三者を含む催し等の感染防止対策

- 施設や建物を利用し、第三者を含む催し等を行う際には、消毒液の常備、設備・備品の消毒、換気、3密を避けるなど、来場者の感染防止策を万全に行うこと。

(6) その他

- 行動範囲が県外に及ぶ時は、最新の情勢を踏まえ慎重に対応することとし、事前に事務局へ相談すること。

別紙様式

近江楽座 活動計画・実績報告書

年 月 日

代表者 チーム名 _____
 学籍番号 _____ 氏名 _____

	活動計画(実施前月 15 日までに提出)	活動実績(実施翌月 15 日までに提出)
日程		
場所		
活動内容		
感染拡大防止策		

※参加者名簿は実績報告時に記入して下さい。

	学籍番号	氏名	学籍番号	氏名
参加者名簿	1		9	
	2		10	
	3		11	
	4		12	
	5		13	
	6		14	
	7		15	
	8		16	

活動計画・実績報告書の様式

7-4 お知らせ

チームへのお知らせ

配信日	タイトル	内容
2021.4.20	近江楽座プロジェクト募集開始について	2021年度近江楽座プロジェクト募集開始のお知らせ
2021.5.11	新型コロナウイルス感染拡大防止について(滋賀県からの5月12日以降の対応要請)	滋賀県の5月12日以降の対応について
2021.5.26	5月29日近江楽座プレゼンテーションの延期について	全学休校にともなうプレゼンテーションの延期と課外活動の禁止について
2021.5.28	2020年度活動成果報告会の動画を公開しました	2020年度活動成果報告会の動画公開について
2021.5.31	2021年度近江楽座プレゼンテーションの実施について	プレゼンテーション実施日の決定
2021.5.31	課外活動再開のお知らせ	授業再開と課外活動の再開について
2021.6.11	高校で活動発表を行うチームを募集します	近江兄弟社高校で、SDGsの達成に向けたアクションプランを考える授業での活動発表について
2021.7.30	高校で活動発表を行うチームを募集します	彦根工業高校でSDGs・マザーレイクゴールズ(MLGs)に関する事前学習での活動発表について
2021.8.6	学生サポートセンターの助成事業の案内	一般社団法人学生サポートセンターより「学生ボランティア団体助成事業」のお知らせ
2021.8.6	湖風祭の学内企画の募集について	湖風祭実行委員会より湖風祭の学内企画募集の案内について
2021.8.6	新型コロナまん延防止等重点措置適用にかかる楽座の活動について	新型コロナウイルスまん延防止等重点措置適用にともなう課外活動の制限について
2021.8.20	コロナウイルス感染拡大に伴う近江楽座の活動について	夏休み期間中の課外活動について
2021.8.26	大学活動レベルが2に引き上げられることに伴う近江楽座の活動について	大学活動レベル引き上げにともなう近江楽座の活動について
2021.9.6	キャンパスSDGsのパネル出展について	オンライン開催の同大会へのパネル出展について
2021.9.29	大学活動レベル引き下げにともなう近江楽座の活動について(10月4日～)	大学活動レベル引き下げにともなう近江楽座の活動について
2021.10.8	近江楽座中間ヒアリング日程	助成金の中間ヒアリングの日程のお知らせ
2021.10.26	大学SDGs ACTION! AWRDS、学生地域づくり・交流大賞	朝日新聞社実施【大学SDGs ACTION! AWRDS】の案内
2021.11.29	中間報告会の日程確定	中間報告会の日程のお知らせ
2022.1.6	感染防止対策の徹底について	コロナとのつきあい方滋賀プランが「レベル0」から「レベル1」に引き上げられた(1月4日)ことに伴う注意喚起。大学の活動レベルは「1」で変更なし。
2022.1.7	滋賀県の警戒レベルが引き上げられました	「レベル2」に引き上げられたことに伴う注意喚起。大学の活動レベルは「1」で変更なし。
2022.2.2	中間報告会の動画を公開しました	12月に行った中間報告会の動画をYouTubeで公開した案内
2022.2.4	実績報告についてのお知らせ	2021年度活動実績報告の提出依頼(期限:3月15日)
2022.2.15	活動における感染リスクの軽減について(注意喚起)	県立学校における部活動の見直し(滋賀県教育委員会)を受けて、2月10日学生支援センターより出された「今後の課外活動の取扱いについて」に伴う注意喚起
2022.2.18	近江楽座最終ヒアリング日程	助成金の最終ヒアリングの日程のお知らせ

配信日	タイトル	内容
2022.3.3	2021 年度活動成果報告会の日程について	活動成果報告会の日程について
2022.3.16	これまで以上の感染防止対策の徹底を!! (注意喚起)	新年度に向けて、学長から「感染防止対策の徹底」要請、学生支援センターから注意喚起が行われ(3月15日)、さらなる注意喚起の呼びかけ
2022.4.5	2021 年度近江楽座 活動成果報告会 (日程決定) 等について	活動成果報告会の概要について
2022.4.12	近江楽座合同説明会のチラシと参加チーム	合同制説明会の概要について

| 近江楽座ホームページ掲載お知らせ

掲載日	タイトル	内容
2021.4.19	2021 年度近江楽座プロジェクト募集 (4/19 ~ 5/17) を開始します	2021 年度プロジェクト募集について
2021.5.27	2020 年度近江楽座活動成果報告会を開催しました	4/21 ~ 4/23 の3日間に分けて開催した成果報告会の内容について
2021.6.4	近江楽座公式 Instagram を開設しました!	近江楽座公式 Instagram の開設について
2021.6.18	令和3年度「近江楽座」審査結果発表!	2022 年度のプロジェクトの採択について
2021.7.6	2021 年度近江楽座 B プロジェクト < 発掘型 > の追加募集を行います (7/9-7/26)	B プロジェクト < 発掘型 > の追加募集について
2021.8.4	2020 年度近江楽座チームの取組をまとめた動画を作成しました!	2020 年度、20 チームの活動を紹介する動画作成について
2021.8.5	令和3年度「近江楽座」Bプロジェクト< 発掘型>追加募集の審査結果発表!	追加募集の採択について
2022.2.2	2021 年度近江楽座中間報告会を開催しました	12/4 ~ 12/17 の4日間の中間報告会の内容について
2022.2.24	2021 年度近江楽座プロジェクトの SNS 一覧	2021 年度近江楽座プロジェクトの SNS のリンクについて
2022.4.8	2021 年度 活動成果報告会のご案内 (4/20)	2021 年度活動成果報告会の開催について

公立大学法人 滋賀県立大学
「近江楽座」

2021 年度活動報告書

2023 年 2 月発行

発行	公立大学法人 滋賀県立大学 地域共生センター 〒 522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500 TEL. 0749-28-8616 FAX. 0749-28-8473
企画・編集	近江楽座事務局
印刷・製本	近江印刷株式会社
構成・デザイン	秦 憲志・石見春香

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転載することは禁止されています

最新情報は、近江楽座ホームページ：<http://ohmirakuza.net/> をぜひ御覧ください

近江楽座